F D活動報告書

第 11 号 (2015 年度)

関西大学大学院会計研究科
(会計専門職大学院)

関西大学大学院会計研究科

教務・F D委員会

平成 28 年 3 月

目 次

はじめに	1
I 授業評価アンケートの実施及びフィードバック方法	
(1) 対象科目	2
(2) 実施方法	2
(3) 分析方法	2
(4) フィードバック方法	2
(5) 対象科目リスト	3
II 平成27年度授業評価アンケート結果概要	
(1) 平成27年度授業評価アンケート(春学期)結果概要	7
(2) 平成27年度授業評価アンケート(秋学期)結果概要	41
(3) 平成27年度授業評価アンケート(系平均)結果概要	89
III 27年度授業評価アンケートフォーム	105
IV 講演会	109

はじめに

関西大学大学院会計研究科は、創設からこれまで10年間の会計専門職教育を行ってきた。この10年間に於いて、教育体制、カリキュラムおよび教育内容・方法など常に研究科として見直し、改善を試みてきた。また、個々の教員においても、それぞれが自己研鑽を繰り返し、最善の教育を目指して取り組んできた。このような取り組みを組織的に行っているのが、FD(Faculty Development)活動である。そして、このFD活動を推進してきたのが教務・FD委員会およびその下部組織としての専攻分野別教務・FD委員会である。このFD活動報告書は、FD活動の一環として作成しており、本研究科における会計専門職教育を継続的に進化・発展させるうえで大きな役割を果たしている。

本研究科では、このFD活動によって、教員の教育能力及び教育の質を高め、教育効果を向上せしめるべく、不断の努力を行っている。教育効果は、単に教員がよりよいと思う教育内容を、教員がよりよいと思う方法で提供するように策を講じるだけでは、改善されない。すなわち、提供される教育への学生の反応を認識しつつ、教育内容やその方法を調整していくことで、より効果的な教育が提供できるようになると考えられる。そのため、本研究科では、設立当初より、学生による授業評価アンケートを実施してきており、この授業評価アンケートの結果は、FD活動の大きな柱の一つとなっている。

本研究科の授業評価の特徴は、①学生自身による自己評価と学生による担当者の授業評価という一般的な事項はもれなく含んでいること、②学生による授業評価の結果に対しては担当教員による分析と授業改善の試みを記述させること、③科目系列の取りまとめ役が、②による複数科目を比較可能な形で自己評価していること、④以上の結果を、教授会及びFD委員会での議論の材料としていること、⑤そして授業評価の結果と分析等を本研究科のホームページにて公開していること、が挙げられる。

FD活動報告書は、上記の学生による授業評価アンケートの結果とそれに対する教員の認識と今後の改善案を中心にして、本研究科が行ったFD活動をまとめたものである。FD活動報告書は、これまで第1号から第10号まで作成され、本書は平成27年度のFD活動をまとめた第11号である。本研究科はこれまで2度の分野別認証評価を受けたが、評価基準のすべてを満たしていると評価され、「認定会計大学院」称号を得ている。このFD活動報告書は、本研究科の自己点検・評価報告書と合わせて、評価を受けるにあたっての資料として提出された。

我々は、今後もこのFD活動を通じて、「世界水準で通用する、理論と実務に習熟した会計専門職業人」を養成すべく、会計専門職教育を継続的に充実・発展させていかなければならない。

今後も、FD活動を継続して行い、FD報告書として公表していくことによって、本研究科の教育が向上していくであろうと確信している。

平成28年3月

会計研究科長 三島 徹也

I. 授業評価アンケートの実施及びフィードバック方法

(1) 対象科目

本報告書に掲載した授業評価アンケートは、平成 27 年度の春学期と秋学期に開講された会計研究科専任教員が担当するすべての授業科目を対象としている（次頁参照）。

(2) 実施方法

本研究科では、授業評価アンケートを各講義の終了時に実施している。

通年開講の論文指導・修士論文を除き、すべての科目において、15 回の講義が実施される。最終講義日の前回である第 14 回目の講義で、授業評価アンケートの質問状と回答用紙が授業担当者によって配布され、最終講義日の講義終了時に授業評価アンケートの回答用紙が授業担当者によって回収される。回収された回答用紙は、授業担当者によって事務所に提出され、そこで集計される。授業評価アンケートは講義時間に影響を与えぬよう、また受講生の正直な回答を促すため、講義時間外に無記名で記入される。集計された結果は、今後の授業内容および方法の改善のための資料として、各授業担当者に配布される。

授業評価アンケートで使用された質問状は、後ページに掲載している。

(3) 分析方法

専任教員が担当する授業科目及び系別平均については、原則として担当教員が分析している。

(4) フィードバック方法

各担当者が前年度の授業評価アンケートとの比較を行い、授業改善が有効であったか否かを検証した。

(5)対象科目リスト(索引)

類別	授業科目	単位	配当年次	系統	開講学期	頁
導入科目群	中級商業簿記	1	1	財務会計	春・秋	7・41
	中級工業簿記	1	1	管理会計	春・秋	8・42
基本科目群	会計専門職業倫理	1	2	横断科目	春・秋	9・43
	企業法	1	1	法律	春前・秋	10・44
	上級簿記	1	1	財務会計	春前・秋	11・12・45
	上級財務会計論	1	1	財務会計	春後・秋	13・46
	上級原価計算論	1	1	管理会計	春前・秋	14・15・47
	上級管理会計論	1	1	管理会計	春後・秋	16・48
	監査制度論	1	1	監査	春後・秋	17・49
	監査基準	1	1	監査	春・秋	18・50
	会計専門職業数学	2	1	横断科目	春	
	会計基準論	2	1	財務会計	秋	51
理論科目群	会計制度論	2	1	財務会計	春	19
	財表作成簿記	2	1	財務会計	秋	52
	戦略管理会計論	2	1	管理会計	秋	53
	上級税務会計論	2	2	税務会計	春	
	租税法会計論	2	1	税務会計	秋	54
	公会計理論	2	1	行政	秋	55
	監査実施論	2	1	監査	秋	
	監査報告論	2	1	監査	秋	56
	商法	2	1	法律	春	20
	会社法	2	1	法律	秋	57
	民法(総則・物権)	2	1	法律	秋	
	経営学理論	2	1	経営	春	
	インベストメント論	2	1	ファイナンス	春	21
	コーポレート・ファイナンス論	2	1	ファイナンス	秋	58
	ミクロ経済学	2	1	経済・IT	秋	
	統計学	2	2	経済・IT	秋	
	国際会計基準論	2	2	財務会計	秋	59
	国際会計制度論	2	2	財務会計	春	
	企業分析論	2	2	管理会計	春	22
	コストマネジメント論	2	2	管理会計	秋	60
	上級税務戦略論	2	2	税務会計	秋	
	公監査論	2	2	行政	不開講	
	政府・自治体会計論	2	2	行政	春	23
	国際監査制度論	2	2	監査	秋	
	金融商品取引法	2	2	法律	春	
	上級会社法	2	2	法律	春	24
	租税法理論	2	2	法律	秋	61
	民法(債権)	2	2	法律	春	
	経営戦略論	2	2	経営	不開講	
	経営組織論	2	2	経営	春	
	資本市場論	2	2	ファイナンス	春	25
	マクロ経済学	2	2	経済・IT	春	
実践科目群	会計事例研究	2	1	財務会計	春	26
	管理会計事例研究	2	1	管理会計	春	
	監査事例研究	2	1	監査	秋	62
	基本会計プログラム演習	2	1	経済・IT	春	27
	基本監査プログラム演習	2	1	経済・IT	秋	63
	BATIC演習	2	1	経済・IT	秋	
	IFRS実務	2	1	財務会計	秋	
	会社経理事務	2	1	財務会計	春	28
	ディスクロージャー実務	2	2	財務会計	秋	64
	税務会計事例研究	2	2	税務会計	春	
	企業法判例演習	2	2	法律	秋	
	起業・株式公開事例研究	2	2	経営	春	
	実践会計プログラム演習	2	2	経済・IT	秋	65
	実践監査プログラム演習	2	2	経済・IT	夏集	
個別演習科目群	ソリューション・イン・アカデミック	2	1	個別演習科目	秋	66-70
	ソリューション・イン・プロフェッショナル	2	2	個別演習科目	春	29-32
	ソリューション・イン・エキスパートタイプ	2	2	個別演習科目	秋	71-77
	論文指導・修士論文(基礎)	2	1	個別演習科目	秋	78
	論文指導・修士論文	4	2	個別演習科目	通年	79-82

類別	授業科目	単位	配当年次	系統	開講学期	頁
横断科目群	特殊講義(企業経営を取り巻く会計の課題と方向)	2	1	横断科目	春	
	特殊講義(経営と会計)	2	1	横断科目	秋	83
	特殊講義(グローバル化と会計)	2	1	横断科目	秋	84
	特殊講義(証券アナリスト協会寄附講座・証券アナリストの基礎)	2	1	横断科目	春	
	特殊講義(ERPと会計)	2	1	横断科目	春	33
	中小企業金融論	2	1	ファイナンス	秋	
	会計検査制度論	2	1	監査	秋	
	実践コミュニケーション	2	1	経済・IT	秋	
	英文会計論	2	2	財務会計	秋	
	会計戦略論	2	2	財務会計	春	34
	資産会計論	2	2	財務会計	春	35
	負債・資本金論	2	2	財務会計	春	36
	企業結合会計	2	2	財務会計	春	
	企業価値マネジメント論	2	2	管理会計	春	
	マネジメント・コントロール・システム論	2	2	管理会計	秋	
	国際税務戦略論	2	2	税務会計	春	
	非営利会計論	2	2	行政	不開講	
	国際公会計制度論	2	2	行政	秋	85
	保証業務論	2	2	監査	春	37
	内部監査論	2	2	監査	春	
	不正摘発監査論	2	2	監査	秋	
	法人税法	2	2	法律	秋	86
	行政法	2	2	行政	不開講	
	プロダクト・マネジメント論	2	2	経営	春	
	国際経営論	2	2	経営	秋	
	リスク分析論	2	2	ファイナンス	春	
	国際財務戦略論	2	2	ファイナンス	秋	
	公共経済学	2	2	経済・IT	秋	
XBRL論	2	2	経済・IT	秋		
実践科目群	国際会計事例研究	2	2	財務会計	秋	
	国際管理会計事例研究	2	2	管理会計	春	
	国際税務会計事例研究	2	2	税務会計	秋	
	公会計・公監査事例研究	2	2	行政	不開講	
	国際監査事例研究	2	2	監査	春	
	企業再生事例研究	2	2	経営	秋	
	リサーチ・メソドロジー	2	2	経済・IT	不開講	
	国際コミュニケーション論	2	2	経済・IT	秋	
	財務会計系					89
	管理会計系					90
非会計系科目群	税務会計系					91
	監査系					92
	法律系					93
	経営系					
	ファイナンス系					94
	行政系					95
	経済・IT系					96
	個別演習科目(ソリューション・イン・アカデミック)					97
	個別演習科目(ソリューション・イン・プロフェッショナル)					98
	個別演習科目(ソリューション・イン・エキスパートタイプ)					99
個別演習科目(論文指導・修士論文)					100-101	
系別平均					102	

※掲載対象科目は、平成27年度開講の会計研究科専任教員担当科目とする。
(国際財務戦略論については、諸事情により未実施)

Ⅱ-(1). 2015 年度授業評価アンケート(春学期)結果概要

科目	中級商業簿記(A)		
配当年次	1	開講時限	春金5
受講者数	12	回答者数	10

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.85	4.40	4	5	4
2	3.00	3.30	3	5	3
3	4.85	4.30	4	5	3
4	4.92	4.30	5	5	2
5	4.85	4.70	5	5	4
6	4.77	4.50	5	5	3
7	4.62	4.40	5	5	3
8	4.85	4.60	5	5	3
9	4.46	4.40	5	5	2
10	4.62	4.30	5	5	2
11	4.77	4.78	5	5	4
12	4.85	4.70	5	5	2
13	2.08	3.00	2・3	5	1
14	2.77	3.10	3	5	1
15	4.69	4.20	5	5	2
16	4.69	4.00	5	5	1
17	4.62	4.44	5	5	3
回答者数	13	10

受講生の傾向

受講生の多くは、日商検定2級レベルの理解が不足している学生である。なかには、簿記の知識がほとんどない受講生もいた。また、回答者数10人のうち8人が留学生であり、日本語で説明して理解してもらえないことが多かった。問題演習中に彼らの解き方を確認して見回っていると、講義中の説明や手順を踏まえていなかったり、検定試験等の問題集を持ち込んで自学自習していることもあった。アンケート結果が昨年よりも下回る項目が多いのは、そのような事情によるところが大きいと思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

簿記一巡の流れを明確に意識して学習してもらうようにした。とくに仕訳、転記、決算の流れを繰り返してトレーニングした。仕訳のレベルは、日商検定4級から2級までを幅広く取り上げた。講義中は説明よりも問題演習に重点をおいて、一人ずつ個別に質問に応じ、全員の理解を確認して回った。とくに今年度は、講義のはじめにミニテストを行い、それを即座に採点して、間違ったところを個別に指導し、ひとりひとりの理解力アップを図った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。次年度も継続することにした。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

日本語でのコミュニケーションが難しい状況は、ゆっくりと説明するなどの対応はもちろんであるが、受講生に講義内容の予習を促し、事前に予備知識を得てもらうことで改善される可能性もある。その意味で、ほぼ毎回の講義でミニテストを行ったことは、ひとつの対応策であった。ミニテストで予習時間が増えたことは、質問13に表れている。次年度は、受講生の様子を見て考えることにしたい。

科目	中級工業簿記(A)		
配当年次	1	開講時限	春月5
受講者数	13	回答者数	10

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.46	4.67	5	5	4
2	3.62	3.22	3	5	3
3	4.08	4.67	5	5	4
4	4.00	4.56	5	5	4
5	3.85	4.67	5	5	4
6	3.92	4.56	5	5	4
7	3.92	4.44	4	5	4
8	4.15	4.56	5	5	4
9	4.08	4.44	5	5	3
10	4.23	4.56	5	5	4
11	3.77	4.67	5	5	4
12	4.77	4.78	5	5	4
13	2.31	3.22	3	5	2
14	2.85	3.33	3	5	2
15	4.15	4.67	5	5	4
16	4.23	4.67	5	5	4
17	3.75	4.56	5	5	3
回答者数	13	10

受講生の傾向

受講者は前回と同じぐらいであるが、受講者の基礎的な簿記についての知識水準には大きな差がある。受講態度は総じて真面目であったと考えている。ただし、一部には授業内容を理解できていない受講者も見受けられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

授業評価アンケートの評価結果について、前回に発生した評点の低下理由が一時的であるか構造的であるかが判別できなかったため、授業の方法についての大幅な変更は行っていない。予習および復習についての声かけには留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

全体的に評価結果の数値がやや低下しているが、これが一時的な現象であるのか、あるいは受講者の増加や受講者のレベルの低下といった構造的な問題であるのかが明らかでないため、慎重に原因の検討を行う必要があると考えられる。また、予習および復習の数値が低いため、今後も予習および復習の時間をかけるように声を掛ける必要があると考えられる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回の評価結果は全ての側面で前回よりも大きく上昇した。そのため、前々回から前回からにかけての評点の低下は一時的な現象であったと解釈することが妥当であると考えられる。したがって、現在の授業の方法をベースにしながら、細かな点の改善を積み重ねることが必要であると考えている。

科目	会計専門職業倫理(A)		
配当年次	2	開講時限	春水1
受講者数	9	回答者数	9

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.89	5	5	4
2	3.31	3.11	3	4	3
3	4.38	4.89	5	5	4
4	4.44	4.78	5	5	4
5	4.50	4.67	5	5	3
6	4.38	4.78	5	5	4
7	4.38	4.78	5	5	4
8	4.50	4.89	5	5	4
9	4.31	4.89	5	5	4
10	4.44	4.78	5	5	4
11	4.44	4.78	5	5	4
12	4.88	5.00	5	5	5
13	2.06	3.00	2	5	1
14	2.25	3.56	3・5	5	2
15	4.19	4.78	5	5	4
16	4.31	4.75	5	5	4
17	4.25	4.75	5	5	4
回答者数	16	9

受講生の傾向

受講者9名とこれまでの最低レベルである。またこのうち5名が留学生で、ばらつきがあるものの日本語そのものの理解度が十分でなかった。留学生も含め、全般的に理解度が低レベルであった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

ディスカッション等では引き続き班編成を行ったが、事例研究については、これまでの班での発表形式をやめ、1人ずつの発表とし、責任をもって一事例を検討する仕組みを採った。一方、他人の協力も必要であることが想定されたため、班での協力体制を促した。その結果、9の事例を取り上げることができた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

秋学期以降はさらに受講生が減少する。これまでとは異なる教材を使用する、事例紹介を増やす等、一層の工夫を行っていく。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

少人数のクラスについては班編成等の工夫が必要である。全員が事例研究を含め、ディスカッション等に参加できるように工夫を重ねていく。

科 目	企業法(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前火2・金3
受講者数	28	回答者数	26

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.56	4.54	5	5	1
2	3.28	3.08	3	4	3
3	4.52	4.46	4	5	4
4	4.76	4.58	5	5	3
5	4.60	4.81	5	5	4
6	4.52	4.54	5	5	3
7	4.16	4.28	4	5	2
8	4.16	4.54	5	5	4
9	4.56	4.65	5	5	4
10	4.20	4.31	4	5	2
11	4.48	4.69	5	5	4
12	4.96	5.00	5	5	5
13	1.56	2.27	2	5	1
14	2.00	2.65	2	4	1
15	3.84	4.23	4	5	3
16	4.28	4.46	5	5	3
17	4.00	4.23	4	5	3
回答者数	26	26

受講生の傾向

企業法は、基本科目であって、かつ会計未修者の学生でも履修可能な科目となっており、比較的春学期に履修登録する学生が多いが、一方で春学期に公認会計士試験の合格を目指す学生などは試験勉強に特化するため、秋学期に履修することもある。ほとんどの学生が授業に対してまじめにかつ熱心に参加し、積極的に参加していたが、ごく少数ではあるが授業を休みがちな学生もいた。難易度としては、あまり高いとは感じられていないようで、それは企業法の基本理念などその根本的な部分を学習するのが目的であって、詳細については扱わないことを前提としているからであろう。同様に、法学初学者であっても受講できるよう配慮している科目なので、授業進度も比較的ちょうど良いようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度の企業法においては、企業法学(広く法学においても)における論文の作成というところに重点を置いた。これまでは、企業法の理解を目的としたレクチャーを行い、それを踏まえて理解度を確認する小テストを行っていた。しかし、法学の文章を書かないし論文を作成するという点においては、学生にとっては難しく感じられるようだったので、今回は一定の授業が進行するごとに論文作成の指導を行うことにした。その効果としては、論文作成の練習回数を重ねるごとに論文の出来は良くなり、最終的な学期末試験においても、比較的論文が書けるようになっていたように思われる。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

企業法という科目は、この科目のみで企業法のすべてが完結するという授業ではない。すなわち、企業法は、企業法関係の発展・応用科目(たとえば、会社法、商法、金融商品取引法など)の基礎となる科目であるから、それらの科目を学ぶ上でも前提となる基本的な考え方を身につけることが第一の目的であるから、これについては受講生全員が理解できるよう配慮したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後の対応としては、企業法においては、その内容を学生に理解してもらい、それを確認するという作業は引き続き必要となるが、上記でも示したように論文作成能力を身につけさせることもまた重要である。今後も引き続き論文作成の指導を続けていくつもりであるが、全体の授業の中でバランスよくそれを組み入れる必要があり、かつより効果的な方法で行っていくべく工夫したい。

科目	上級簿記(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前月2・木3
受講者数	11	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.77	4.64	5	5	4
2	3.62	3.27	3	5	3
3	4.46	4.64	5	5	4
4	4.46	4.55	5	5	4
5	4.31	4.55	5	5	3
6	4.38	4.55	5	5	4
7	4.54	4.64	5	5	4
8	4.62	4.27	4・5	5	2
9	4.23	4.27	5	5	1
10	4.31	4.45	5	5	3
11	4.15	4.73	5	5	4
12	5.00	4.91	5	5	4
13	2.00	2.36	1・3	4	1
14	3.46	3.55	4	5	1
15	4.46	4.45	5	5	3
16	4.23	4.55	5	5	3
17	4.00	4.55	5	5	4
回答者数	13	11

受講生の傾向

日商検定1級や公認会計士・税理士を目指して、専門学校とのダブルスクールで頑張っている受講生が何名かいた。全体的に簿記の習熟度が高く、講義中に質問を受けることが昨年度より少ないように感じた。主体的に受講し、講義への参加意欲も高い様子であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義中の説明は、テクニカルに覚えて解くのではなく、原理・原則に従って考えて解くことを意識してもらうようにした。説明と問題演習の時間配分を工夫して、より基本的な事項を優先的に理解してもらうようにした。重要な基本例題は講義中に解いてもらい、その場で個別に質問に応じ、全員の理解を確認して回った。とくに今年度は、受講生の簿記の習熟度が高いことを考慮して、論点毎の説明や重点の置き方にメリハリをつけた。総合的な満足度(質問11、質問17)が高いことから、受講生のニーズと合致するところが多かったと考えてよい。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。受講生の簿記の習熟度等に配慮しながら、次年度も継続することにしたい。

科目	上級簿記(A2)		
配当年次	1	開講時限	春前月3・木2
受講者数	13	回答者数	12

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.75	5	5	4
2	—	3.50	3	5	3
3	—	4.42	5	5	3
4	—	4.25	4・5	5	3
5	—	4.00	4	5	3
6	—	4.25	4	5	4
7	—	4.33	4	5	3
8	—	4.33	4	5	3
9	—	3.67	4	5	1
10	—	4.33	4	5	4
11	—	4.25	4・5	5	3
12	—	4.92	5	5	4
13	—	1.50	1	3	1
14	—	2.42	3	4	1
15	—	3.83	4	5	2
16	—	3.92	4・5	5	2
17	—	4.17	5	5	2
回答者数	—	12

受講生の傾向

上級簿記(A1)と同じ難易度・範囲で講義を展開しており、簿記の習熟度もA1と同程度に高い状況であったが、アンケート結果は全体的にA2の方が低調である。顕著な違いをいくつかピックアップしてみると、A2はA1に比べて、①教員の説明をそれほど積極的には聞いていない(質問5)、②宿題やテストを講義内容の理解に活かしていない(質問9)、③予習と復習の時間がかかなり少ない(質問13、質問14)。これらから推察すると、A2はA1に比べてモチベーションが低く、受け身の傾向にある受講生が多かった可能性がある。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義中の説明は、テクニカルに覚えて解くのではなく、原理・原則に従って考えて解くことを意識してもらうようにした。説明と問題演習の時間配分を工夫して、より基本的な事項を優先的に理解してもらうようにした。重要な基本例題は講義中に解いてもらい、その場で個別に質問に応じ、全員の理解を確認して回った。とくに今年度は、受講生の簿記の習熟度が高いことを考慮して、論点毎の説明や重点の置き方にメリハリをつけた。A1と同様の講義展開であるが、総合的な満足度(質問11、質問17)はA1よりも低い。覚えることを中心に勉強してきた受講生が多かったとすれば、違和感のある講義展開であったかもしれない。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

A1とA2は、上級簿記を学籍番号でクラス分けしたものであり、テストの内容は同じである。クラス毎に異なる難易度・範囲で講義をすることはできない。また、受講生のニーズは様々であるが、テクニカルな解法に重点を置くことは、上級レベルの簿記の学習方法として効果的ではないし、会計大学院の講義として相応しいものではない。受講生の簿記の習熟度等に配慮しながら、講義を展開することにした。

科 目	上級財務会計論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後月3・木2
受講者数	20	回答者数	20

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.33	4.45	4	5	4
2	3.40	3.25	3	4	3
3	4.40	4.20	4	5	4
4	4.53	4.25	4	5	3
5	4.40	4.35	4・5	5	3
6	4.27	4.35	4	5	3
7	4.20	4.20	4	5	3
8	4.27	4.35	4	5	3
9	4.53	4.40	5	5	3
10	4.47	4.40	4	5	4
11	4.67	4.55	5	5	4
12	4.80	4.90	5	5	3
13	2.00	2.50	2	4	1
14	2.20	2.90	2	5	2
15	3.80	4.15	4	5	3
16	4.20	4.45	4	5	4
17	4.27	4.20	4	5	3
回答者数	15	20

受講生の傾向

受講生は真摯に受講しており、講義時間外での予習・復習も、一部を除き、積極的に行っていたようである。それに対して、講義は昨年と同様であるが、質問3「この授業は教員によってよく準備されていましたか」や質問4「学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか」が昨年より下がっており、受講への熱心さが伺える。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義は、基本的にパワーポイントで資料提示をしつつ行っているが、適宜、ホワイトボードを使用して、追加説明をするようにしている。また、各回の講義内容のポイントを、講義の最後と次回の講義の冒頭で説明し、同時に、次回の講義内容の範囲と注意すべき事項を説明することで、予習・復習に役立つようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

質問No.6「教科書や配付資料の利用」について、質問No.7「ホワイトボード、パソコンの利用」について、昨年度よりポイントが下がっており、講義中のツール使用については、昨年度と同様の方法であるが、秋学期講義での学生の反応を見た上で、さらなる工夫を講じる必要があるかもしれない、の工夫を講じたためか、昨年度の「教科書や配布資料の利用について」「ホワイトボード、パソコンの利用について」は改善していると思われる。しかし、講義時間外での学習（予習・復習）はポイントが下がっており、再度、受講生が予習・復習を行うような工夫を講じたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生の傾向で示したとおり、一部を除いて、熱心な受講であり、そのため講義に物足りなさを感じている場合が懸念される。受講生の理解度に配慮しつつ、必要に応じて、時間の許される範囲かつ講義速度が早いと感じない範囲で、追加的なより深い内容を盛り込む、あるいは、繰り返すといった工夫を講じるつもりである。

科 目	上級原価計算論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前月3・木2
受講者数	18	回答者数	17

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.71	5	5	4
2	3.22	3.29	3	4	3
3	4.56	4.53	5	5	2
4	4.72	4.47	5	5	1
5	4.28	4.76	5	5	4
6	4.44	4.47	5	5	3
7	4.56	4.59	5	5	3
8	4.44	4.71	5	5	4
9	4.41	4.41	4・5	5	3
10	4.28	4.47	5	5	3
11	4.39	4.65	5	5	4
12	4.72	4.94	5	5	4
13	2.11	2.88	1	5	1
14	3.00	3.35	3	5	1
15	4.11	4.29	4	5	3
16	4.47	4.59	5	5	4
17	4.38	4.44	5	5	3
回答者数	18	17

受講生の傾向

昨年度からの受講生を含んでいる点で、A02のクラスと異なる。しかし、受講生の傾向(習熟度にばらつきがあるなど)はほぼ同様である。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

科目系を同じくする先生と綿密に連絡を取りながら、受講生の水準を確認し、基本的な説明だけでなく、発展レベルの解説を含めて実施した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

全体の傾向は、昨年と同様である。そのため、これまでと同様に、受講生の水準に合わせた方法で講義に取り組んでいきたい。また、科目系を同じくする先生と連絡を密にとっていくことを計画している。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も、受講生の習熟レベルなどをふまえつつ、科目系を同じくする先生と連絡を取りながら対応していきたい。

科 目	上級原価計算論(A2)		
配当年次	1	開講時限	春前月2・木3
受講者数	11	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.55	5	5	3
2	—	3.45	3	5	3
3	—	4.45	5	5	3
4	—	4.55	5	5	3
5	—	4.45	4	5	4
6	—	4.55	5	5	4
7	—	4.18	4	5	3
8	—	4.36	4・5	5	3
9	—	4.36	5	5	3
10	—	4.27	4	5	3
11	—	4.64	5	5	3
12	—	4.73	5	5	2
13	—	1.82	2	3	1
14	—	2.45	3	4	1
15	—	4.55	5	5	3
16	—	4.45	5	5	3
17	—	4.45	5	5	2
回答者数	—	11

受講生の傾向

受講生の習熟レベルにばらつきがあり、この点で多様性が認められた。ただし、おおむねは学習に対して真面目に取り組む学生が多かったと思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

基本的な説明にとどまらず、多様な学生のニーズに対応するように、発展レベルの解説を含めて行った。また、科目系を同じくする先生と綿密に連絡を取り合った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も授業の質の改善に向けて、科目系を同じくする先生と連携して、学生ニーズの充足(解説の範囲の多様化と、基礎的な教科書や原価計算基準に依拠した体系的な進め方など)に努めていく予定である。

科 目	上級管理会計論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後月2・木3
受講者数	27	回答者数	24

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	3.79	4.29	4	5	3
2	3.14	3.25	3	5	2
3	3.93	3.67	4	5	2
4	3.93	3.79	4	5	2
5	3.86	3.67	4	5	2
6	3.71	3.79	4	5	2
7	4.07	4.13	4	5	3
8	4.14	4.04	4	5	3
9	3.79	3.71	4	5	2
10	4.14	3.92	4	5	3
11	3.50	3.79	4	5	2
12	4.57	4.91	5	5	4
13	1.86	2.21	1・3	5	1
14	2.64	2.79	3	5	1
15	4.00	3.83	4	5	2
16	4.00	3.96	4	5	2
17	3.79	4.05	4	5	2
回答者数	14	24

受講生の傾向

全体としては、受講生は講義に真面目に出席するとともに、熱心に受講した。ただし、受講生の中の管理会計に関する知識水準には大きな差が見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

全体として講義計画に即して、丁寧に講義を行うように心がけた。また、予習および復習を受講生に促すように留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

講義の進度および講義の理解度については向上が見られるが、講義計画に沿った程度、および予習と復習の程度、および講義の満足度の数値が下がっているため、それぞれについて改善を行う必要があると考えている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義計画との整合性、および予習と復習の時間、および全体的な満足度、さらに授業の理解度については評点が改善したことから、一定の成果があったと考えられる。他方で授業の準備、説明の仕方等についての評点が小幅ながら低下している。全体としては大きな変動がなかったため、細かな改善を積み重ねていくことが必要であると考えている。

科目	監査制度論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後火2・金3
受講者数	27	回答者数	26

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.13	4.42	5	5	3
2	3.67	3.50	3	5	3
3	4.60	4.46	5	5	2
4	4.33	4.58	5	5	2
5	4.00	4.27	5	5	2
6	4.27	4.35	5	5	2
7	4.33	4.27	5	5	2
8	4.40	4.38	5	5	2
9	4.40	4.46	5	5	3
10	4.27	4.31	5	5	1
11	4.40	4.38	5	5	3
12	4.53	4.85	5	5	3
13	2.33	2.85	2	5	1
14	3.67	3.46	3	5	1
15	4.13	4.04	4・5	5	1
16	4.33	4.19	5	5	1
17	4.27	4.20	5	5	3
回答者数	15	26

受講生の傾向

PA/PAIBコースにおける選択必修科目(基本科目)群に属するという関係上、受講生の出席率(項目12)は95%を超えており極めて高い出席率となっている。出席率から見ると、勉学に対する意欲が相対的に高まっているようにも解される。

しかし上記アンケート結果より、予習課題に対する時間は若干増加したものの(項目13)、復習課題に対する対応に伴う授業の復習時間が昨年より減少してしまっている(項目14)。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度も、昨年度に監査基準改訂があったため、改訂箇所に関する重点的な説明を加えたパワーポイントによるスライドを用意し改訂の重要論点を確実に講義の中で押さえるようにした。スライドの最後には、従来通り受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するための参考文献を列挙した。またこれら配布用の資料は、関西大学CEASに授業当日中にアップロードし、WEB配信を前提とした学生の復習に役立つように配慮した。

授業が2回終了するごとに、前2回分の理解度を確認するためのとともに、復習を動機付けるために小テストを授業時間の最初15分程度で実施し、添削後、返却した。また優秀答案を氏名を伏せて配布するとともに、添削上のポイントを追加し解説を行なった。最終的に、小テスト実施→添削→返却(添削ポイント表・講評)を繰り返すことで、各自にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるように、去年以上にヨリ一層心懸けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今回より小テストの添削結果の返却に当たり、成績優秀者の添削済み答案の写しに加えて、添削に際してこちらで用意したポイント表の写しを配布し解説を加えるようにした。この形を次年度も続けることで、学生側での復習課題の作成に流れを与えるようにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

小テストの添削結果の返却に当たり、添削時の論点表の写しとともに成績優秀者の添削済み答案の写しを配布し解説を加えているが、この形を次年度も続けることで、学生側での復習課題の作成に流れを与えるようにしたい。これに加えて、予習時間を多少でも増やすべく、インフォメーション・システムないしCEASにおいて、予め重要論点を明示したい。

科目	監査基準(A)		
配当年次	1	開講時限	春水2
受講者数	31	回答者数	29

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.22	4.10	4	5	3
2	3.33	3.17	3	5	2
3	4.22	4.03	4	5	3
4	3.56	4.03	4	5	3
5	4.11	3.97	4	5	3
6	4.22	4.03	4	5	3
7	4.50	3.93	4	5	3
8	3.44	4.10	4	5	3
9	3.11	3.86	4	5	3
10	4.22	4.14	4	5	3
11	3.78	3.86	4	5	2
12	4.33	4.86	5	5	3
13	1.67	2.24	1	5	1
14	2.00	2.52	2	5	1
15	3.89	3.90	4	5	2
16	3.56	4.10	4	5	3
17	4.00	3.92	4	5	2
回答者数	9	29

受講生の傾向

受講生は非常にまじめで、ほぼ全員が毎回出席している状況でした。積極的に発言する人は限られていましたが、積極的に発言しなくても授業内容を適切に把握して高得点を取る受講生も散見されました。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は担当者が異なりますが、今年度はできるだけ客観的に理解度を判断できるように正誤式の問題を授業でも取り上げ、その時点での理解度をはかるとともに、期末試験においても同様の問題を出すことで理解した内容を評価するように工夫しました。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

試験準備をしている受講生にとっても必須科目のため、受験勉強の負担にならないよう授業の予習、復習について時間をあまりかけないように授業した結果がそのままアンケート結果として出ていると思います。この点については今後もその方向で進めたいと思いますが、期末試験問題が正誤式のためちゃんと準備しないと結果が出ないので、少なくとも復習時間は多少とるようになると期待しています。

科目	会計制度論		
配当年次	1	開講時限	春水3
受講者数	28	回答者数	27

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.24	3.89	4	5	2
2	3.47	3.22	3	4	2
3	4.29	3.89	4	5	3
4	4.35	3.93	4	5	2
5	4.35	4.26	4	5	2
6	4.24	3.22	4	5	1
7	4.24	4.04	4	5	2
8	4.35	4.00	4	5	3
9	3.88	3.67	3	5	3
10	4.29	3.96	4	5	1
11	4.06	3.70	4	5	2
12	4.82	4.96	5	5	4
13	2.41	2.22	1	5	1
14	2.65	2.48	3	5	1
15	3.94	3.59	4	5	2
16	4.53	3.74	4	5	2
17	3.65	3.50	4	5	2
回答者数	17	27

受講生の傾向

受講生はほぼ毎回出席しておりまじめだが、予習・復習の時間が減少している(Q12からQ15)。また、学習の進度が早いと感じる度合い(Q2)が高まっているのが特徴的である。かつてなく、企業志向と留学生の割合が高まってきたこともその原因かと思われる。学習効果(Q15からQ17)も総じて減っている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の「今後の対応」で記したようにこれまでの方式を踏襲してきたが、昨年、今年とその効果が減ってきているようである。それを講義期間中に感じて、質問を減らし、説明を増やすなどの対応も試みたが、熱心に聞く学生と、そうでない学生に二分したように思う。今後も同様の傾向が続くということであれば、対応を考える必要がある。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

記述能力の改善には討論が不可欠なので、授業においても頻繁に質問をし、自由に答させるように工夫している。これを継続したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義内容を少し減らし、進度を落として、ゆっくりと説明するなどして、理解度を高める工夫が必要に思う。とりわけ、予習・復習に時間をかけなくなってきたのに対応する必要がある。

科 目	商法		
配当年次	1	開講時限	春月4
受講者数	16	回答者数	16

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.22	4.56	5	5	4
2	3.11	3.06	3	4	3
3	4.67	4.69	5	5	3
4	4.67	4.69	5	5	4
5	4.56	4.81	5	5	4
6	4.56	4.69	5	5	4
7	4.00	4.44	5	5	3
8	4.22	4.63	5	5	3
9	4.56	4.69	5	5	4
10	4.44	4.69	5	5	4
11	4.67	4.81	5	5	4
12	4.67	4.94	5	5	4
13	1.67	2.25	2	5	1
14	2.11	2.38	2	5	1
15	3.89	4.44	5	5	3
16	4.44	4.63	5	5	4
17	4.25	4.38	4	5	3
回答者数	9	16

受講生の傾向

商法の履修者数としては、16名で例年通りということがいえる。公認会計士試験受験者や特に企業法学に興味を持っている学生であれば履修するであろうが、会計学習をメインに勉強する学生は履修しない傾向にある。基本科目ではなく選択して受講しているということから、受講している学生は比較的熱心でまじめな学生が多い。授業の難易度については、法学初学者にとっては難しく感じたところもあるかもしれないが(1年生春学期で受講できるため企業法と並行することになる)、極力平易な説明を心がけ、全体的にみると特に難しく感じるようなことはなかったようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

商法は、会社法などと異なり、少し抽象的でイメージがしにくいところもあるので、なるべくイメージのしやすい具体例や取引の実例などを示すように心がけた。また、商法上のいわゆる論点といったところも扱ったが、こちらも最高裁判例を例に取り上げて説明するなどの工夫を心がけた。しかし、あまりにも丁寧な授業を心がけるとすると、進度との関係もあるので、説明の中で重要なものや自学習では困難なものはしっかりと時間をかける一方で、そうでない部分についてはスピード化を図った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今後も今年度と同様にバランスよく網羅的に理解できるように心がけたい。また、より内容をイメージしてもらえよう、図や具体例を適宜最適・最新なものに入れ替えながら、学生の理解の助けとなるようにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

上でも述べたように、説明の中で重要なものや自学習では困難なものはしっかりと時間をかけて、そうでない部分についてはスピード化を図るということは、今後も必要となり、より一層メリハリのついた授業を心がけていきたい。特に、商法はこの授業で完結するものであるから(企業法や会社法は他の授業、例えば上級会社法等で補完できる)、より一層全体の中でバランスよく授業内容を配置していくことが必要となる。

科目	インベストメント論		
配当年次	1	開講時限	春木4
受講者数	4	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.43	4.00	4	4	4
2	3.19	3.33	4	4	2
3	4.38	4.00	4	4	4
4	4.43	3.67	3	5	3
5	4.43	4.33	4	5	4
6	4.33	4.33	4	5	4
7	4.24	3.67	4	4	3
8	4.55	3.67	3	5	3
9	4.24	3.67	4	4	3
10	4.30	3.67	3	5	3
11	4.30	4.00	3・4・5	5	3
12	4.71	3.67	3	5	3
13	2.05	2.67	2	4	2
14	2.43	3.33	4	4	2
15	4.14	4.00	3・4・5	5	3
16	4.14	4.00	3・4・5	5	3
17	3.95	4.33	4	5	4
回答者数	21	3

受講生の傾向

会計とインベストメント論との関係に興味を持つレベルの高い学生が多かった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度授業担任者が不慮の病気であり、引継ぎがなされていないので、独自のカリキュラムで行った。会計との関係を意識しつつも、ファイナンスに特化した内容の授業を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度と同様の対応を行う。つまり、会計との関連を意識しつつもファイナンスに特化した内容の授業を行う。

科目	企業分析論		
配当年次	2	開講時限	春金2
受講者数	7	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.55	4.67	5	5	4
2	3.36	3.17	3	4	3
3	4.45	4.33	4	5	4
4	4.45	4.33	4	5	4
5	4.55	4.50	4・5	5	4
6	4.09	4.67	5	5	4
7	4.45	4.83	5	5	4
8	4.36	4.67	5	5	4
9	4.18	4.50	4・5	5	4
10	4.55	4.67	5	5	4
11	4.45	4.33	4	5	4
12	4.73	5.00	5	5	5
13	1.91	2.00	1・2・3	3	1
14	2.91	2.17	2	3	1
15	4.45	4.17	4	5	3
16	4.55	4.33	4	5	4
17	4.18	4.33	4	5	4
回答者数	11	6

受講生の傾向

受講者は総じて真面目であった。また、会計に関する知識水準も高かった。講義中には、演習課題をめぐって多くの熱心な質問を受けた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

前回の評価結果が十分に高かったと判断したため、前回の授業方法を継続する内容となっている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今回の講義では、授業速度が速くなったという評価を除けば、多くの項目において前年度よりも高い評価結果となった。そのため、今回の講義内容について、細かな改善は必要と考えられるが、全体的にはこの内容で継続するつもりである。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

評点にある程度の変動はあるが、全体としては前回と同様に高い評価であったと解釈している。そのため、今回の講義内容について細かな改善は必要と考えられるが、全体的にはこの内容を継続する予定である。

科目	政府・自治体会計論		
配当年次	2	開講時限	春木2
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.00	4	4	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	5.00	5	5	5
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	5.00	5	5	5
10	4.33	5.00	5	5	5
11	5.00	5.00	5	5	5
12	4.67	5.00	5	5	5
13	2.33	3.00	3	3	3
14	2.67	3.00	3	3	3
15	5.00	4.00	4	4	4
16	5.00	4.00	4	4	4
17	5.00	5.00	5	5	5
回答者数	3	1

受講生の傾向

受講者は1名のみであった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

対話形式により、最近のトピックを取り入れながら受講生の興味を引き出すよう工夫した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

受講生が減少する傾向にあるが、引き続き公会計分野への興味を増進させるよう、タイムリーな話題等を提供し前向きに授業に取り組むよう工夫を重ねていきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

他の公会計系の科目との統合、配当年次の工夫により、より受講しやすくするとともに、受講生に関心が持てるよう引き続き努力していく。

科 目	上級会社法		
配当年次	2	開講時限	春火4
受講者数	6	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	4.50	4・5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.63	4.83	5	5	4
4	4.75	5.00	5	5	5
5	4.63	4.83	5	5	4
6	4.63	4.67	5	5	4
7	4.63	4.83	5	5	4
8	4.63	4.83	5	5	4
9	4.63	5.00	5	5	5
10	4.63	4.67	5	5	4
11	4.75	4.83	5	5	4
12	4.88	5.00	5	5	5
13	2.50	2.33	3	3	1
14	2.88	2.17	2	3	1
15	4.75	4.83	5	5	4
16	4.50	4.83	5	5	4
17	4.63	4.83	5	5	4
回答者数	8	6

受講生の傾向

受講生は6名と少なかったが、全員が公認会計士試験を受験する予定の学生であった。上級会社法という科目の特性上、特に会社法を深く学習したいという学生や公認会計士試験合格を目的とした学生が受講するという傾向がある。受講生全員が既にある程度の実力を有しており、レベルの高い授業を実施することができた。また、同時に授業態度および意欲もあり、積極的な議論が展開された。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

上級会社法は、講義科目ではあるが少人数で構成されており、一人一人をきめ細かく指導するよう心掛けた。特に、対話や論文作成指導などを中心として授業を行うことによって、各学生の誤りや弱点などを個別に見出し、それに対応するというを行った。また、上級会社法は、会社法に関連する授業のうちで最終段階の授業となるので、題材としてもハイレベルなものを扱った。実力のある学生であっても難しい問題を扱ったりしたが、議論の中で解決を導き出すことができるよう配慮しながら対話や質疑応答などを行いながら授業を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

受講生には、上級会社法という法学の特性から、論理的な思考能力や理論の組み立てなどをしっかりと身につけてもらいたいと思う。そこで、特に、対話や文章作成における説得力のある論理的な説明などが行えるよう、授業の中では配慮したい。特に上記能力は個人によってもかなりばらつきがみられるものなので、一人一人を丁寧に指導していくつもりである。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

上級会社法は、上記で示したように比較的少人数で構成されることから、極力個人に対応した授業を心がけたい。もちろん、個人に対応した対話や論文指導を行うことは、その内容を聞くほかの学生にとっても十分学習になると考えられるので、その点も意識しながら授業を行っていきたい。しかし、全受講生の中で考えるとやはり実力にばらつきがあるので、すべての学生が理解し満足できるような授業を工夫して行っていく必要がある。

科 目	資本市場論		
配当年次	2	開講時限	春土1
受講者数	3	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	3.33	4	4	2
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	4.00	4	4	4
4	5.00	4.33	4	5	4
5	4.75	4.33	4	5	4
6	4.75	3.67	4	4	3
7	4.75	3.67	4	4	3
8	5.00	4.00	4	4	4
9	4.75	4.00	3・4・5	5	3
10	4.75	4.00	4	4	4
11	5.00	4.33	4	5	4
12	4.75	4.00	3・4・5	5	3
13	2.50	1.33	1	2	1
14	2.50	1.67	2	2	1
15	5.00	3.67	4	4	3
16	4.75	4.00	4	4	4
17	4.75	3.67	4	4	3
回答者数	4	3

受講生の傾向

1名は授業に積極的に参加してくれていた。
他の2名は、内向的な性格によるものなのか、積極的な発言が少なかったように思えた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生とのコミュニケーションを重視し、トピックな話題を取り上げ、会計に対する関心を高めるよう留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生とのコミュニケーションをより密にし、実践的な演習を増加させるよう心掛けたい。
今年度は、講義形式が主流で、解説に多くの時間を割き過ぎたことを反省している。
受講生の積極性を引き出したいと考えている。

科 目	会計事例研究		
配当年次	1	開講時限	春水1
受講者数	12	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.38	4.18	4	5	3
2	3.23	3.27	3	5	3
3	4.23	4.09	4	5	3
4	3.69	4.09	4	5	3
5	3.62	4.36	4	5	4
6	4.08	4.36	4	5	4
7	4.08	4.09	4	5	3
8	3.92	4.18	4	5	3
9	3.69	3.82	4	5	2
10	4.00	4.36	4	5	4
11	3.77	4.00	4	5	3
12	4.62	4.82	5	5	3
13	1.77	2.36	1	5	1
14	2.15	2.64	2	5	1
15	3.50	4.27	5	5	3
16	3.77	4.27	5	5	3
17	3.67	4.27	5	5	3
回答者数	13	11

受講生の傾向

受講生は非常にまじめで、ほぼ全員が毎回出席している状況でした。積極的に発言する人は限られていましたが、積極的に発言しなくても授業内容を適切に把握して高得点を取る受講生も散見されました。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は担当者が異なりますが、今年度はできるだけ直近の事例を取り上げて紹介する工夫をしました。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

試験準備をしている受講生にとって受験勉強の負担にならないよう授業の予習、復習について時間をあまりかけないように授業した結果がそのままアンケート結果として出ていると思います。この点については今後はもう少し事前準備の時間を作ってもらって、その知識の上で参加型の授業を展開できるようにしたいと思います。

科 目	基本会計プログラム演習		
配当年次	1	開講時限	春水1
受講者数	16	回答者数	16

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.45	4.38	4	5	3
2	3.25	3.25	3	4	3
3	4.20	4.25	4	5	4
4	4.35	4.38	4	5	3
5	4.30	4.63	5	5	4
6	4.25	4.44	4	5	4
7	4.40	4.56	5	5	4
8	4.40	4.50	5	5	3
9	4.60	4.56	5	5	4
10	3.80	4.56	5	5	4
11	4.30	4.50	5	5	3
12	4.95	5.00	5	5	5
13	2.35	3.19	5	5	1
14	4.45	4.00	5	5	1
15	4.15	4.25	5	5	3
16	4.35	4.44	5	5	3
17	4.21	4.50	5	5	3
回答者数	20	16

受講生の傾向

この講義は、秋学期開講科目であるが、都合により春学期の開講となり、受講生に十分な知識がない場合が散見された。また、受講生のうち3分の1以上が留学生であり、演習中に受講生間で母国語で会話することがあり、私語であるのか、わからないことを聞いているのかの、判断ができない環境にあった。また、講義終了後の課題の趣旨を充分理解できないまま実施した受講生が散見された。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

上述のとおり、開講時期の違い、留学生の高い割合から、配布レジュメのほか、板書を多用することで、理解しやすいように工夫を講じた。また、机間巡回においては、各受講生の進捗状況を見ながら、適宜指示を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

極端にコンピュータ処理・操作を苦手とする受講生に対しては、別途課題を与えたり、処理・操作の質問の時間を別に設けるなどして、予習・復習によるキャッチ・アップを促すよう工夫を講じるつもりである。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義内容や速度と学生の理解度とのバランスに配慮しながら、講義順序を調整し、演習内容の趣旨を理解させ、全体の理解度をあげるよう工夫を講じるつもりである。

科目	会社経理実務		
配当年次	1	開講時限	春木4
受講者数	18	回答者数	18

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.68	4.56	5	5	3
2	3.41	3.00	3	3	3
3	4.55	4.50	5	5	3
4	4.55	4.56	5	5	3
5	4.64	4.44	5	5	3
6	4.55	4.44	5	5	3
7	4.45	4.44	5	5	3
8	4.59	4.56	5	5	3
9	4.32	4.33	5	5	3
10	4.41	4.50	5	5	3
11	4.36	4.39	5	5	2
12	4.82	4.78	5	5	3
13	1.91	2.94	2	5	1
14	2.09	2.39	2	5	1
15	4.32	4.39	5	5	3
16	4.50	4.50	5	5	3
17	4.45	4.39	5	5	3
回答者数	22	18

受講生の傾向

受講生18名中、出席回数は15回10、14回・13回各3、12回・11回各1名と概ね良好であった。しかし、質問回数は1名当たり平均2回以下と低調であり、研究室で懇談の機会を設定したにもかかわらず利用する学生がいなかったことなど、受講生全般に積極性が欠けていた。一方レポート作成のために実施している事前テーマ発表は効果があったと思われる。しかし、肝心のレポートは数名を除いて低レベルであり、特に論理性が弱い。また、提出期限をできるだけ遅くしたがそれに見合った努力は感じられなかった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

パワーポイントは従来通り使用したが、今年はレジュメの配布に代えて昨秋出版した「会計専門職大学院で学ぶ会社経理実務」をテキストとした。本をテキストとしたことは受講生の予習復習の時間数増加に効果があったと考える。一方毎回の授業で自発的に質問する学生は一部に偏っていたことから、毎回数名を指名して発言を求めたが、全体として受身の姿勢を変えることは難しかった。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

受講者全般に積極性が欠け、レポートの質が低下していることについて対策をと執りたい。例えば毎回の授業で全員に発言させる方式や、レポートにかかる事前テーマ発表(授業の第14・15回)の充実等を検討したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講への積極性を高めレポートの質向上に努めたい。このために、①本をテキストにしていることもあり思い切ってパワーポイントの量を減らし受講生との対話の時間を増やす、②事前テーマ発表(授業の第14・15回)をレポートの底上げに繋がるように工夫する、という2点を検討したい。

科 目	ソリューション・イン・プロフェッショナル(清水クラス)		
配当年次	2	開講時限	春木4
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

1名のみ受講した。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと
受講生の理解度に応じて、速さや演習内容を工夫した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き少人数となることが予測されるため、受講生の要望に応じた対応を採っていく。

科 目	ソリューション・イン・プロフェッショナル(大西クラス)		
配当年次	2	開講時限	春木5
受講者数	3	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.33	4	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.75	4.33	4	5	4
4	4.75	4.67	5	5	4
5	4.75	4.67	5	5	4
6	4.50	4.67	5	5	4
7	4.00	4.67	5	5	4
8	4.50	4.67	5	5	4
9	4.25	3.33	3	4	3
10	4.50	4.00	4	4	4
11	4.25	4.67	5	5	4
12	4.25	4.67	5	5	4
13	1.25	1.67	2	2	1
14	1.25	2.00	2	2	2
15	4.25	4.67	5	5	4
16	4.25	4.67	5	5	4
17	4.00	4.67	5	5	4
回答者数	4	3

受講生の傾向

演習科目のため、受講生は3人である。いずれも受講態度は真面目であり、ディスカッションにも熱心に参加していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

前回の評価結果より大きな問題はないと判断したため、大きな変更は行っていない。論文の輪読とディスカッションを重視して演習を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

新設科目のため前年度との比較はできないが、評価結果自体は比較的良いものであったと考えられる。そのため、以後も今年度のような評価を獲得できるように、継続して努力することが必要であると考えている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体として、授業の満足度および理解度については高い評点であったため、大きな問題はないと考えている。そのため、今後も今年度のような評価を獲得できるように継続して努力が必要であると考えている。また、宿題および予習復習については検討する必要性を認識している。

科 目	ソリューション・イン・プロフェッショナル(松本クラス)		
配当年次	2	開講時限	春金4
受講者数	2	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	3.00	3	3	3
14	—	3.00	3	3	3
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	2

受講生の傾向

受講生の授業参加度あるいは熱心度を測る出席率(項目12)において、100%を達成しており、また演習のための予習(項目13)と復習(項目14)の時間がそれぞれ1時間程度確保されているため、今年度は熱心な受講生の傾向が見受けられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

演習最初の段階で学生からの希望を聴取し、監査論の諸論点に関するエッセイ作成形式による回覧・添削・評価の方法を採った。このため担当者個々が課題に対する分析・資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを行えるように、複数の課題を事前に配布した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

各自にパワーポイントを利用した資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを求めることで、自ら争点を抽出し、資料を探索できる能力を養える方法をより徹底する必要がある。

科目	ソリューション・イン・プロフェッショナル(三島クラス)		
配当年次	2	開講時限	春木2
受講者数	2	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	3.50	2・5	5	2
14	—	3.00	1・5	5	1
15	—	4.50	4・5	5	4
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	2

受講生の傾向

ソリューションという科目の特性上、学生数は当然に少なく(本年度は2名)、学生は基本的に参加意欲も高く熱心である。2名の学生については、それぞれその学習目的や基礎学力に違いがあったため、それぞれ別クラスで授業を行った(つまり1名の授業を2回)。ソリューション科目は特に個別対応が迫られる科目であるため、今回はそのような配慮を行った。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の実績はないが、今回においては個人が目的としているところを明確にとらえてそれに合わせる形で授業を行った。上記で示したように、ソリューションを2クラスに分けて実施したのがその表れである。それぞれの学生において、学習進度を配慮し、そのレベルや内容を相談しながら授業を進め、ソリューションならではのきめ細かい授業を心がけた。さらに、必要に応じて夏季休暇期間中も自主的にソリューション授業を行うなどの措置もとった。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も今年度のようなきめの細かい授業を引き続き行っていきたいと思う。しかし、学生数やそれぞれの学生の学習目的やその実力によっては、今回行った方法が必ずしもとれるというわけではない。授業の最初の段階で、それらの学生の特性を早めに見極め、それぞれの学生に適合したきめ細かな指導ができるよう対応していきたい。

科目	特殊講義(ERPと会計)		
配当年次	1	開講時限	春金4
受講者数	11	回答者数	10

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.71	4.40	4	5	4
2	2.93	3.10	3	4	3
3	4.71	4.50	4・5	5	4
4	4.71	4.50	4・5	5	4
5	4.64	4.40	5	5	3
6	4.50	4.60	5	5	4
7	4.57	4.40	4	5	4
8	4.71	4.50	4・5	5	4
9	4.29	4.10	4	5	1
10	4.64	4.40	4	5	4
11	4.43	4.30	4	5	3
12	4.93	5.00	5	5	5
13	1.64	2.10	2	3	1
14	1.71	2.00	2	3	1
15	3.86	4.20	4・5	5	3
16	4.36	4.30	4	5	3
17	4.14	4.10	4	5	3
回答者数	14	10

受講生の傾向

受講者10名(初回1回だけ受講の1名を除く)中、出席回数は15回5、14回・13回各2、11回1と概ね良好で、質問回数も1名当たり約5回とまずまずであった。昨年一昨年と同様に授業の当初は理解度に個人差があったように思うが、回を重ねるにつれボトムアップが進み、後半の質問内容や最終のレポートから、ほぼ全員が一定水準の理解に達したと判断できる。ただ、アンケートの結果を見る限りでは、昨年に比べ授業の進め方・話し方等について満足度が低下している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講者の理解度と問題意識向上のために、授業のパワーポイント枚数を削減するとともに、ERPを学ぶことの必要性和重要性の説明を加え、また受講生と双方向の対話時間を増やすように努めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

受講者の今後の学習意欲や理解度について対策を執りたい。例えば、授業でERPを学ぶことの必要性和重要性について実感を持ってもらえるような事例等を検討したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き受講者の理解度と問題意識向上のために、受講生と双方向の対話時間を確保したい。ただ、口頭での補足説明はアンケートの結果を見る限り受講生の満足度にあまりプラスには働かなかったようであり、より具体的で興味を持つような事例を取り上げるようにしたい。

科目	会計戦略論		
配当年次	2	開講時限	春火3
受講者数	5	回答者数	5

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.40	4	5	4
2	3.00	3.00	3	4	2
3	4.33	4.20	4・5	5	3
4	4.33	4.00	3・5	5	3
5	4.33	4.40	4	5	4
6	4.33	4.40	4	5	4
7	4.33	4.60	5	5	4
8	4.33	4.20	4・5	5	3
9	4.33	3.80	5	5	2
10	3.67	4.00	4	5	3
11	4.67	4.80	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.33	2.60	1	5	1
14	2.33	3.00	2・5	5	1
15	4.33	4.40	5	5	3
16	4.33	4.60	5	5	4
17	4.33	4.40	5	5	3
回答者数	3	5

受講生の傾向

受講生全員が、緊張感を持ちつつ熱心に受講していたと思われる。予習・復習については、最頻値からみて、充分行った学生とそうではない学生に分かれたようである。同時に、受講生の講義の受け止め方も評価が分かれたようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の数が少ないことから、教壇からではなく、より学生の近くから講義を実施した。また、講義の冒頭において、前回の講義内容を確認し、講義全体からみた各回の講義内容の位置づけを説明した。さらに、受講生に頻回に簡単な質問を与え、理解を深めやすいようにつとめた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

受講生の反応を引き出すような工夫を講じているが、それを上回って、学生が質問やディスカッションができるような工夫を講じていきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

小教室であったため、パワーポイントが見づらい状態にあり、受講生の人数からこれを所与として、追加的な資料を配布するなどして、学生の理解のための材料をより多く提示できるようにしていきたい。

科目	資産会計論		
配当年次	2	開講時限	春金2
受講者数	5	回答者数	5

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.80	4.60	5	5	4
2	3.00	3.60	3	5	3
3	4.50	4.80	5	5	4
4	4.60	4.40	5	5	3
5	4.30	4.20	4・5	5	3
6	4.30	4.40	4	5	4
7	4.50	4.40	4	5	4
8	4.50	4.80	5	5	4
9	4.30	4.20	4	5	4
10	4.30	4.00	3・5	5	3
11	4.40	4.00	4・5	5	2
12	4.50	4.60	5	5	4
13	1.60	2.00	1・3	3	1
14	2.60	2.40	2	4	1
15	4.20	4.40	5	5	3
16	4.50	4.40	4	5	4
17	4.30	4.40	4	5	4
回答者数	10	5

受講生の傾向

講義中に私語はなく、説明に集中している様子であった。受講生は概ね簿記の習熟度が高く、全体的に講義しやすい雰囲気であった。講義後に質問して意欲的に学ぼうとする受講生もいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

会計上の資産について、現行制度上の取扱いだけでなく、発展的な論点も取り上げた。市販のテキストではなく会計基準等の原文を教科書として使用し、「原文を読んで理解する」「原文の表現を学びとる」ことを重視した。とくに今年度は、ときおり簿記の計算問題を使って、理論が計算にどのように反映されているのかなど、理論と計算の結びつきも意識してもらうようにした。また、会計上の専門用語に使い方や使い分けがあることを説明し、受講生と共に考え、ディスカッションすることもあった。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。次年度も継続することにした。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。受講生の簿記の習熟度等に配慮しながら、次年度も継続することにした。

科目	負債・資本金論		
配当年次	2	開講時限	春月5
受講者数	5	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	3.67	4.00	4	5	3
2	3.00	3.25	3	4	3
3	3.67	4.00	4	5	3
4	4.67	4.50	4・5	5	4
5	4.67	4.25	4	5	4
6	3.67	4.00	4	5	3
7	3.67	3.50	2・3・4・5	5	2
8	5.00	4.50	4・5	5	4
9	4.00	4.75	5	5	4
10	4.67	4.50	4・5	5	4
11	5.00	4.50	4・5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.67	3.75	3	5	3
14	2.67	2.25	3	3	1
15	5.00	4.50	4・5	5	4
16	4.67	4.50	4・5	5	4
17	4.67	4.25	4	5	4
回答者数	3	4

受講生の傾向

受講生は全員毎回出席しておりまじめである。予習にかかる時間が大幅に増加し、反面、復習の時間が減少している。(以上、Q12からQ15)。また、学習の進度が早いと感じる度合い(Q2)は昨年同様に高い(負担が大きい)のが特徴的である。学習効果(Q15からQ17)は総じて高い。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年記した「今後の対応」で学生の力量に合わせて調整するつもりでいた(負担を減らすことを念頭に置いていた)が、受講者の参加意識が高いので、力量に合わせて「負担を大きくした」。そこで、毎回、次回に講ずる内容を予習させ、講義日以前に予め与えた問題の解答を提出させ、講義当日は、提出された解答を紹介しながら改善点を指摘して、討論へ持って行った。ただし、5名中、一人だけ負担を高めたこの方式に適合できない者がいた。全体としてみれば、昨年以上に授業への評価が高まっている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

昨年記載の「今後の対応」の通りの結果が出た。昨年度的方式では少し負担が大きかったようである。次年度は、同じ方針で行くが、少し学生の力量に合わせて内容を調整したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

次年度は昨年までの方式(予習と報告)か今年度の方式(事前の論述式回答と討論)のいずれが良いか、講義の最初の段階で判断して、負担度合いを調整する。しかし、いずれにしても予習中心の講義方式であることには変わりはない。

科目	保証業務論		
配当年次	2	開講時限	春水2
受講者数	6	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.67	5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	4.83	5	5	4
4	5.00	4.83	5	5	4
5	5.00	4.83	5	5	4
6	4.80	4.50	4・5	5	4
7	5.00	4.83	5	5	4
8	5.00	4.83	5	5	4
9	4.80	4.50	5	5	3
10	5.00	4.67	5	5	4
11	5.00	4.83	5	5	4
12	4.80	5.00	5	5	5
13	2.00	2.50	3	3	1
14	1.40	2.50	3	3	1
15	4.40	4.83	5	5	4
16	5.00	4.83	5	5	4
17	5.00	4.67	5	5	4
回答者数	5	6

受講生の傾向

本科目は、基本科目の「監査制度論」「監査基準」等のその他の監査系科目を履修した学生を前提に配置された応用科目であり、監査に対するモラルの高い学生が集まっていることから、出席率は去年に引き続き100%であった(項目12)。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

わが国金融庁企業会計審議会による保証業務に関する枠組みと日本公認会計士協会による実務指針の他、アメリカの基準及び国際基準に基づいた保証業務の枠組みや内容を理解することを目的として、前半は座学による講義スタイルを採り、後半は、前半において習得された保証業務に関する理解度を確認するため、受講生自らが想定する「保証業務の提案」をパワーポイント及び提案書の形で、他の受講生に対してプレゼンテーションをさせ、自らが提案する当該保証業務の魅力を説かせるようにした。他の受講生には、当該受講生が行ったプレゼンテーションと提案書の内容について、5点スケールで幾つかの項目ごとに相互評価させた。

この際の評価方法が直感や単なる印象に終始しないように、予め6つの項目(情報収集の程度や情報分析の程度等)について個別に評価させるとともに、報告者のプレゼンテーションについて修正すべき内容を自由記述させた。報告者には、事後的に当該修正すべき内容のリストを手渡し、将来におけるプレゼンテーション能力の向上を期待した。最終的に当該業務に関する提案書をレポートの形で提出させ、採点し、その点数と相互評価の結果を纏めて成績の評価とした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

提案される保証業務の拡がりがないことを避けるため、過年度における保証業務提案の優秀なものを紹介することにした。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

過年度の提案された保証業務と優秀なものを予め提示する方法を採用し、過年度よりも理解を高度化するとともに、当該理解が反映されたより優れた保証業務の提案を望みたい。

Ⅱ-(2). 2015 年度授業評価アンケート(秋学期)結果概要

科目	中級商業簿記(B)		
配当年次	1	開講時限	秋金5
受講者数	7	回答者数	5

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.00	4.75	5	5	4
2	3.00	3.25	3	4	3
3	4.00	4.50	4・5	5	4
4	4.00	4.50	4・5	5	4
5	5.00	4.75	5	5	4
6	4.00	4.50	4・5	5	4
7	5.00	4.50	4・5	5	4
8	5.00	4.75	5	5	4
9	5.00	4.50	4・5	5	4
10	3.00	4.75	5	5	4
11	4.00	4.75	5	5	4
12	5.00	4.50	4・5	5	4
13	3.00	3.25	4	4	2
14	2.00	3.25	4	4	2
15	4.00	4.25	4	5	4
16	3.00	4.25	4	5	4
17	5.00	4.00	4	5	3
回答者数	1	5

受講生の傾向

受講生は、主に、春学期に当該科目の単位が不認定となった学生であった。その他には、入学前履修の制度を利用して受講した学生と、学部生であった。いずれにせよ、日商検定2級レベルの理解が不足している学生である。受講生の大半が留学生であり、日本語でのコミュニケーションに不安があったが、春学期とは異なり、理解してもらえることが多かった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

簿記一巡の流れを明確に意識して学習してもらうようにした。仕訳の範囲は、日商検定4級から2級までを幅広く取り上げたが、受講生の理解度や希望に合わせて講義を展開した。講義中は全体説明よりも問題演習に重点をおいて、徹底した個別指導を行った。すなわち、多くの問題を配布して解いてもらい、分からないところは一人ずつ個別に解決して、理解を確認しながら各自のペースで問題を解き進めていくという形をとった。また、講義のはじめにミニテストを行い、それを即座に採点して個別に指導し、ひとりひとりの理解力アップを図った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今回、受講生は学部生のみで、しかも初めて簿記を学習する段階にあった。大学院の講義にとって、これはイレギュラーな状況であり、その都度、対応を考えることにする。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ている。受講生の簿記の習熟度等に配慮しながら、次年度も継続することにしたい。

科目	中級工業簿記(B)		
配当年次	1	開講時限	秋木5
受講者数	7	回答者数	5

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.20	4	5	4
2	3.00	3.20	3	4	3
3	4.50	4.60	5	5	4
4	3.50	4.40	4	5	4
5	4.50	4.80	5	5	4
6	4.50	4.40	4	5	4
7	4.50	4.60	5	5	4
8	5.00	4.60	5	5	4
9	3.50	4.20	4	5	4
10	4.50	4.60	5	5	4
11	4.50	4.40	4	5	4
12	3.50	4.40	5	5	3
13	1.50	3.20	2	5	2
14	3.00	3.40	4	4	2
15	3.50	4.20	4	5	4
16	4.00	4.20	4	5	4
17	4.00	4.50	4・5	5	4
回答者数	2	5

受講生の傾向

昨年よりも受講者数が増加した。受講者は概してまじめに授業に出席していた。ただし、一部には十分に受講する様子のない学生も見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

導入科目の再履修のため、緊張感を持って勉強するように声かけを意識した。特に予習および復習の声かけを行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今回も、全体としては高い評点であったと考えている。しかしながら、その一方で予習および復習に関する時間があまり取られていなかった点については課題があると考えられる。また、本クラスでは工業簿記を苦手科目とする履修者が多いためであると解釈できるものの、今後の勉強に対する意識付けについては、今後の改善の必要があると考えている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回は受講生が予習を十分に行うようになっており、その他の項目も概ね良かったと考えている。そのため、今回の取り組みをこれからも継続できるように留意するつもりである。

科目	会計専門職業倫理(B)		
配当年次	2	開講時限	秋水2
受講者数	14	回答者数	14

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.56	4.79	5	5	4
2	3.11	3.21	3	5	3
3	4.44	4.71	5	5	4
4	4.56	4.79	5	5	4
5	4.78	4.71	5	5	4
6	4.44	4.64	5	5	3
7	4.33	4.71	5	5	3
8	4.56	4.71	5	5	4
9	4.11	4.71	5	5	4
10	4.56	4.64	5	5	4
11	4.78	4.64	5	5	3
12	4.78	4.71	5	5	4
13	1.89	2.50	3	5	1
14	1.89	2.50	2	5	1
15	4.22	4.50	5	5	3
16	4.67	4.64	5	5	3
17	4.22	4.43	5	5	3
回答者数	9	14

受講生の傾向

受講者14名には2名のCPA合格者が含まれており、全体的にも会計・監査全般にわたる理解のレベルが高かった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生のレベルが高かったこともあり、最新の情報や、やや高度(専門的、実務的)な事項も理解を見ながら講義内で話すように心がけた。また、昨年の反省を踏まえて、ディスカッション等で用いる事例について慎重に選択を行った。その結果、今回配った事例等については興味を持って分析に取り組んでいたように思われる。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

新しく追加した内容(事例の追加、ケーススタディ)は適切なものであったと考えられるが、それをを用いて受講生にどのように前向きに考えさせ、議論を進めていくかについては工夫が必要と感じた。事例等をさらに興味を引くように加工して提供する等を検討していく。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講者数によって班編成、プレゼンやディスカッションの仕方等に工夫が必要である。2016年春学期は受講者がやや増えることが想定されるため、十分なディスカッション等ができるよう、班編成、事例の選択に留意していきたい。

科目	企業法(B)		
配当年次	1	開講時限	秋月2
受講者数	13	回答者数	10

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.83	4.44	5	5	3
2	3.17	3.22	3	4	3
3	4.83	4.56	5	5	4
4	4.83	4.44	5	5	3
5	4.67	4.56	5	5	3
6	4.33	4.56	5	5	3
7	4.50	4.33	4・5	5	3
8	4.50	4.33	4	5	4
9	4.67	4.33	5	5	2
10	4.83	4.22	4	5	3
11	4.67	4.44	5	5	3
12	4.83	4.89	5	5	4
13	2.33	1.78	1・2	4	1
14	2.50	3.11	3	5	1
15	4.17	4.00	4	5	1
16	4.50	4.44	4	5	4
17	4.00	4.22	5	5	3
回答者数	6	10

受講生の傾向

企業法(B)は、春学期に開講している企業法(A)と同様、基本科目であって会計未修者の学生でも履修可能な科目である。そこで、企業法(B)は、企業法(A)の再履修者と、企業法(A)を履修することなく(B)を履修した学生がいるが、ほとんどの学生は(A)を履修しているため、春学期の(A)よりは受講者数は少なく、半分以下であった。受講生の授業態度としては、出席率も高く出席している学生はまじめで熱心であった。また、再履修者であるか否かといったことは授業態度には影響しなかった。授業進度やレベル等についても特に問題はないようであった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

企業法(A)と同様に、今年度から企業法に関する論文作成にも重点を置くようにした。すなわち、企業法という科目の特性上、基本的な部分については、論文執筆の練習の中で論理的な文章を組み立てて各自説明することができるように心掛けた。また、対話の中でも、説得力のある説明ができるようになることについても配慮した。さらには、大部分を占めるレクチャーの部分についても、そのバランスを配慮した。特に、再履修の受講生については、論文作成が苦手であるように感じたが、最終回の試験では大きくその能力は向上していたように思われる。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

企業法の授業の理解ということではできているが、それを自分で口頭で説明したり、文章で書いたりということになると難しくなる学生が多い。このギャップを埋められるような授業、すなわち、レクチャーと対話と文章作成のバランスをうまく考慮した授業を行いたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

企業法という法学科目においては、その内容を理解できることはもちろん必要であるが、さらには法的で論理的な文章を書く能力、および対話において説得力のある説明ができる能力を身に付けられるよう指導を行いたい。そこで、いわゆるレクチャーにももちろん重点を置かざるを得ないが、そのバランスに配慮しつつも論文執筆の練習と対話による学習にはより力を入れたい。

科目	上級簿記(B)		
配当年次	1	開講時限	秋木2
受講者数	14	回答者数	10

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.80	5	5	4
2	3.43	3.50	3	5	3
3	4.57	4.90	5	5	4
4	4.50	4.50	4・5	5	4
5	4.43	4.80	5	5	4
6	4.50	4.70	5	5	4
7	4.50	4.70	5	5	4
8	4.36	4.70	5	5	4
9	4.21	4.20	5	5	3
10	4.29	4.40	4	5	4
11	4.36	4.50	5	5	3
12	4.50	4.80	5	5	4
13	3.00	2.80	2	5	1
14	3.29	3.40	3	5	2
15	4.21	4.40	5	5	3
16	4.36	4.60	5	5	4
17	3.92	4.40	5	5	3
回答者数	14	10

受講生の傾向

受講生の多くは、以前に当該科目の単位が不認定となった学生、もしくは、導入科目群の履修が終わって当該科目を初めて受講できるようになった学生である。今年度は、入学前履修の制度を利用して受講している学生もいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

春学期の当該科目と同じく、講義中の説明は「覚えて解く」のではなく「考えて解く」ことを意識してもらうようにした。基本的に重要な論点は、優先的に取り上げて説明した。問題演習の時間は全員の理解を確認して回り、質問があれば、その場で一人ずつ個別に対応して解決した。とくに秋学期は、上述の受講生の傾向からして日商検定2級レベルの理解が十分でないこともあるので、そのことに配慮しながら、受講生のレベルに見合った講義展開を心がけた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

基礎力に不安を感じるが多かった。まずは夏季休暇中に、日商検定2級までの内容を各自でしっかりとフォローしておいてもらいたい。今後の対応としては、講義終了後に復習と反復練習を促すようにする。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

春学期の当該科目の受講生と比べると基礎力に不安を感じるが多いが、講義の全体としては良い感触を得ている。受講生の簿記の習熟度等に配慮しながら、次年度も継続することにした。

科 目	上級財務会計論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋火5
受講者数	10	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.43	4.43	5	5	3
2	3.29	2.86	3	3	2
3	4.36	4.00	5	5	2
4	4.36	4.43	5	5	2
5	4.43	4.43	5	5	1
6	4.36	4.00	5	5	1
7	4.43	4.00	5	5	1
8	4.29	4.29	5	5	1
9	4.43	3.71	5	5	1
10	4.43	4.71	5	5	4
11	4.29	4.14	5	5	1
12	4.93	5.00	5	5	5
13	3.07	2.43	2	5	1
14	3.07	2.43	1・2・3	5	1
15	4.21	4.29	5	5	1
16	4.29	4.14	5	5	1
17	4.36	4.17	5	5	1
回答者数	14	7

受講生の傾向

回答者全員が無欠席だが、予習・復習の時間が少し足りない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年だけの臨時の担当であったが、ゆっくり、ていねいに講義を進めた結果、そこそこの満足度が得られたように思える。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

次年度は担当が再度変わるので、ここについては記載なし。

科目	上級原価計算論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋火4
受講者数	17	回答者数	13

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.62	5	5	4
2	—	3.38	3	4	3
3	—	4.77	5	5	4
4	—	4.85	5	5	4
5	—	4.54	5	5	2
6	—	4.54	5	5	4
7	—	4.69	5	5	4
8	—	4.62	5	5	4
9	—	4.31	5	5	3
10	—	4.46	4	5	4
11	—	4.31	5	5	1
12	—	4.77	5	5	3
13	—	2.38	2	5	1
14	—	2.69	2	5	2
15	—	4.23	5	5	1
16	—	4.33	5	5	1
17	—	4.25	4・5	5	3
回答者数	—	13

受講生の傾向

基本的に原価計算を不得意とする学生が多かった。そのため、原価計算の基本(日商簿記検定の2級程度)から解説をはじめ、段階的に高度な知識を習得できるように心がけてレクチャーした。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は不開講であるため、比較することはできない。ただし、受講生の状況に合わせて、基本的な事項を繰り返し説明し、理解を促進するように努力した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も、後期のクラスについては同様の状況が予測されるため、基本的な部分(例えば、あらゆる原価計算の基本になる費目別計算など)に重点を置いてレクチャーを進めていきたいと考えている。

科 目	上級管理会計論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋月4
受講者数	17	回答者数	16

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.20	4.56	5	5	4
2	3.20	3.75	4	5	2
3	3.93	4.44	5	5	3
4	3.67	4.38	5	5	2
5	4.00	4.50	5	5	3
6	3.73	4.31	5	5	2
7	3.93	4.00	5	5	2
8	3.93	4.63	5	5	4
9	3.67	4.38	4	5	3
10	3.87	4.38	5	5	3
11	3.86	4.44	5	5	3
12	4.80	4.75	5	5	4
13	2.80	2.13	1	5	1
14	3.27	2.75	2	5	1
15	4.13	4.19	4	5	3
16	4.21	4.31	5	5	2
17	4.00	4.06	4・5	5	2
回答者数	15	16

受講生の傾向

受講生は、全体としてまじめな学生が多かった。出席および授業中の演習課題に積極的に取り組んでいたと考えている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の理解度を改善する必要があると考えたため、全般的な説明を丁寧にするのと同時に、演習中に理解の遅れている学生の指導を丁寧にするよう留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

評点のなかで、最高点および最頻値の数値は、比較的良かったと考えられる。しかしながら、最低点では最低値の1が連続している。この状況については、一部の受講生は講義が全く理解できておらず、それが評点の平均値を下げている可能性が予想される。また、授業進度および予復習の点数は改善していることから、授業進度および意識付けについては一定の成果があった可能性もある。授業進度は、既に適正に近い状況にあるため、これ以上遅くすることは問題があると考えられる。そのため、授業進度は現在を維持したままで、指導をさらに丁寧に行う必要があると感じている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

評点が全般的に改善しているため、丁寧に説明することが一定の効果があったと考えている。しかしながら、他方で予習および復習の評点が大きく下がっている。そのため、予習および復習に対する意識付けを行うことが必要であると考えている。

科目	監査制度論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋金3
受講者数	12	回答者数	9

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.55	4.33	5	5	2
2	3.18	3.44	3	5	3
3	4.70	4.33	5	5	3
4	4.55	4.33	5	5	3
5	4.36	4.44	5	5	3
6	4.55	4.33	5	5	3
7	4.55	4.44	5	5	3
8	4.45	4.22	5	5	3
9	4.64	4.11	5	5	3
10	4.64	4.00	5	5	2
11	4.64	4.22	5	5	3
12	4.82	4.67	5	5	2
13	2.73	2.56	1・2	5	1
14	3.27	2.89	1・2・3・5	5	1
15	4.55	4.11	5	5	2
16	4.45	4.11	5	5	2
17	4.60	4.11	5	5	2
回答者数	11	9

受講生の傾向

基本科目(必修科目)群に属するという関係上、受講生の出席率(項目12)は80%強となっており、昨年度に比して低下しているものの、高い出席率であり勉学に対する意欲は相対的に高いように解される。

しかし上記アンケート結果より、授業に対する予習時間(項目13)も復習時間(項目14)も低下しており、必ずしも十分な時間が確保されているとは見受けられない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

本年度も昨年度と同様に、企業会計審議会による監査基準改訂があったため、改訂箇所などについて追加的なパワーポイントによるスライドを用意し、監査制度に関する重要論点を確実に講義の中で押さえるようにした。スライドの最後には、従来通り受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するための参考文献を列挙した。これら配布用の資料は、関西大学インフォメーション・システムに授業当日中にアップロードし、授業録画によるWEB配信を前提とした学生の復習に役立つように配慮した。

授業が2回終了するごとに、前2回分の理解度を確認するためのとともに、復習を動機付けるために小テストを授業時間の最初15分程度で実施し、添削後、返却した。また優秀答案を氏名を伏せて配布するとともに、添削上のポイントを追加し解説を行なった。最終的に、小テスト実施→添削→返却(添削ポイント表・講評)を繰り返すことで、各自にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるように、去年以上にヨリ一層心懸けた。

しかしながら、過年度に比して小テスト・期末テストの成績が伸びなかったのは残念である。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

復習課題の任意提出を促すとともに、授業中に適宜、質問を提起することで出席者から解答を引き出し、参加意欲を高めるよう心懸ける必要がある。それが予習と復習の時間増加に繋がるものと期待される。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

小テストの添削結果の返却に当たり、添削時の論点表の写しとともに成績優秀者の添削済み答案の写しを配布し解説を加えているが、この形を次年度も続けることで、学生側での復習課題の作成に流れを与えるようにしたい。これに加えて、予習時間を多少でも増やすべく、インフォメーション・システムないしCEASにおいて、予め重要論点を明示したい。

科目	監査基準(B)		
配当年次	1	開講時限	秋水2
受講者数	8	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.00	5.00	5	5	5
2	2.90	3.17	3	4	3
3	3.90	4.67	5	5	4
4	3.30	4.33	4	5	4
5	3.30	4.67	5	5	4
6	3.70	4.83	5	5	4
7	3.70	4.33	5	5	3
8	3.70	4.33	4	5	4
9	3.00	4.17	4	5	3
10	3.70	4.67	5	5	4
11	3.50	4.67	5	5	3
12	4.80	4.67	5	5	4
13	2.70	2.50	2	5	1
14	2.80	2.17	2	3	1
15	3.80	3.83	4	5	1
16	3.90	4.33	4	5	4
17	3.90	4.50	4・5	5	4
回答者数	10	6

受講生の傾向

受講生は非常にまじめで、ほぼ全員が毎回出席している状況でした。積極的に発言する人は限られていましたが、積極的に発言しなくても授業内容を適切に把握して高得点を取る受講生も散見されました。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は担当者が異なりますが、今年度はできるだけ客観的に理解度を判断できるように正誤式の問題を授業でも取り上げ、その時点での理解度をはかるとともに、期末試験においても同様の問題を出すことで理解した内容を評価するように工夫しました。春学期の情報があるためか、学生の試験への準備状況は非常によく、満点が続出する状況でした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

公認会計士等の試験準備をしている受講生にとっても必須科目のため、受験勉強の負担にならないよう授業の予習、復習について時間をあまりかけないように授業した結果がそのままアンケート結果として出ていると思います。この点については今後もその方向で進めたいと思いますが、期末試験問題については春学期と比べ成績がかなりよかったので、復習に時間をかけた結果だと思っています。

科目	会計基準論		
配当年次	1	開講時限	秋火3
受講者数	26	回答者数	20

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.22	4.10	4	5	2
2	3.22	3.10	3	5	1
3	4.44	3.95	4	5	1
4	4.44	4.15	4	5	1
5	4.56	4.20	4	5	2
6	4.44	3.80	4	5	1
7	4.33	4.00	4	5	1
8	4.44	4.00	4	5	2
9	4.33	4.00	4	5	2
10	4.56	4.30	4	5	3
11	4.44	4.20	5	5	1
12	5.00	4.75	5	5	3
13	2.22	2.50	2	5	1
14	2.00	2.40	2	5	1
15	4.44	3.95	4	5	1
16	4.56	3.83	3・5	5	1
17	4.33	3.88	4	5	1
回答者数	9	20

受講生の傾向

昨年までの受講生と比較して、熱心さが足りないように感じた。予習・復習時間は多くないものの、前年より増加している。しかし、欠席もやや増えた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年がうまくいったので同じ方法を採用したが、熱心さに欠けるようで、主体性・積極性が減退したように思う。その原因を特定しにくい、企業への就職を希望する者が増えたことも原因かと思う。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

「昨年度」も今年度も学習者の主体的・積極的参加を誘発できたようなので、次年度もこれを引き継ぐこととする。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

次年度は担当者が変わるので、ここの記載はなしとする。

科目	財表作成簿記		
配当年次	1	開講時限	秋木3
受講者数	27	回答者数	21

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.45	5	5	1
2	3.36	3.57	3	5	3
3	4.36	4.38	5	5	1
4	4.43	4.33	5	5	1
5	4.50	4.29	5	5	1
6	4.50	4.19	5	5	2
7	4.29	4.24	5	5	1
8	4.29	4.43	5	5	2
9	4.29	3.76	4	5	1
10	4.29	4.24	4	5	2
11	4.21	4.10	4	5	1
12	4.86	4.95	5	5	4
13	1.86	1.95	1	5	1
14	2.93	2.62	2	5	1
15	4.07	4.05	4・5	5	1
16	4.36	4.24	5	5	1
17	4.14	4.05	5	5	2
回答者数	14	21

受講生の傾向

簿記の習熟度の高い受講生と、そうでない受講生に大きく分かれ、テストの得点に顕著な差が見られる状況であった。前者の受講生は、すでに日商検定1級を取得していたり、専門学校等とのダブルスクールで頑張っていることも多かったが、しかしながら、とくに連結会計は計算問題としては解けるが、仕訳したり精算表を作成することは難しい様子であった。専門学校等では計算問題として扱うことが多く、仕訳することが少ないというヒアリングを得たので、もしかしたらそれが一因である可能性はある。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義の全体を通じて、基本的で重要な論点を優先的かつ反復的に取り扱うことで、知識の定着が図られるように計画した。講義中の説明は、テクニカルに覚えて解くのではなく、とくに連結会計では簿記一巡の手続を念頭におきながら、原理・原則に従って考えて解くことを意識してもらうようにした。問題演習の時間は全員の理解を確認して回り、質問があれば、その場で一人ずつ個別に対応して解決した。問題演習の時間にやり残した問題は宿題として、講義内容の理解と復習を促したが、それに関連する質問9のポイントは昨年度に比べると低い。配布した問題は昨年度とほぼ同じであるから原因は不明であるが、計算問題としての出題形式に慣れていると、違和感のある問題であったかもしれない。しかしながら、簿記である以上、仕訳することは基本であるので、その点はこの講義で大切にしている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今年度の講義展開は全体的に良い感触を得た。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

全体的に良い感触を得ているので、次年度も継続することにしたい。ただし、昨年度と比べて質問9のポイントが低い。昨年度の講義展開と大きな変更はなく、原因は不明である。次年度の評価も踏まえて検討することにしたい。

科目	戦略管理会計論		
配当年次	1	開講時限	秋月3
受講者数	32	回答者数	27

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.48	4	5	4
2	—	3.41	3	5	3
3	—	4.44	5	5	3
4	—	4.54	5	5	3
5	—	4.58	5	5	4
6	—	4.46	5	5	3
7	—	4.42	4	5	3
8	—	4.46	5	5	3
9	—	4.50	5	5	3
10	—	4.50	4・5	5	4
11	—	4.54	5	5	3
12	—	4.85	5	5	4
13	—	2.65	2	5	1
14	—	3.04	3	5	1
15	—	4.42	4	5	3
16	—	4.50	4・5	5	4
17	—	4.32	4	5	3
回答者数	—	27

受講生の傾向

管理会計についてある程度の知識を身に着けた学生から、基本的な知識が不足する学生まで、非常に幅広いものであった。ただし、受講する学生についてはおおむね熱心であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の管理会計にかかわる習熟度に大きな差が見られたため、基本的な事項を説明するパートと、これを踏まえて現実の企業での問題について考えるパートに区分して、レクチャーを構成するように心がけた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も、幅広い学生に対応することが求められると考えられるため、基本的な部分(例えばキータームやキー概念など)を説明する部分と、応用的な部分(例えばキー概念を使った企業行動の説明など)に分けて、それぞれの関心に合うように対応していきたい。

科目	租税法会計論		
配当年次	1	開講時限	秋木4
受講者数	18	回答者数	14

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.32	3.71	4	5	1
2	3.16	3.43	3	5	3
3	4.37	4.07	5	5	1
4	4.37	3.86	5	5	1
5	4.53	3.79	4・5	5	1
6	4.21	3.71	4	5	1
7	4.53	3.64	5	5	1
8	4.53	3.93	5	5	1
9	4.21	3.50	3	5	1
10	4.32	4.21	4・5	5	2
11	4.26	3.64	5	5	1
12	4.58	5.00	5	5	5
13	1.74	1.71	1	5	1
14	2.42	2.43	3	5	1
15	4.32	3.57	4	5	1
16	4.21	3.36	4・5	5	1
17	4.05	3.50	4・5	5	1
回答者数	19	14

受講生の傾向

今年度の受講生は、税務会計の既修者と初学者に大きな学力差が生じていた。出席率(質問No.12)は昨年度よりも高かったが、講義内容のレベルを考えると、特に初学者は授業の予習(質問No.13)、復習(質問No.14)が重要である。しかし、データをみると、予習(質問No.13)の最頻値が1であることや、講義時の様子、また、テスト結果から総合的に判断すると、その学習不足が目立っていた。この結果、各質問項目の最低点に1が多く現れ、ほとんどの項目の平均が、昨年平均を下回る結果になったと考えられる。なお、講義に使用するテキストや授業内容については、昨年度からの変更はない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の自宅学習時間を増やすため、講義内で昨年度よりも多くの過去問を解かせ、それに関する問題を復習問題として提示した。また、講義においては、計算過程が空欄で表示されている問題を多用し、計算過程を受講生に理解させるよう努めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

過去問を講義内においてできる限り多く扱うためには、租税理論を非常にコンパクトに説明する必要がある。市販のテキストに加えて、講義レジュメや配布資料を組み合わせることによって、講義内における理論と計算の時間配分に留意したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

税務会計の基礎となる租税法理論の説明に要する時間を圧縮するため、レジュメや資料を充実させる。また、所得税法については、各種所得金額の計算が重要であるが、今年度の講義では時間不足の印象があったため、所得税法の学習内容を見直して同計算の時間を確保する。

科目	公会計理論		
配当年次	1	開講時限	秋火2
受講者数	3	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.50	4・5	5	4
2	—	3.00	3	3	3
3	—	4.00	3・5	5	3
4	—	4.50	4・5	5	4
5	—	3.50	3・4	4	3
6	—	3.50	3・4	4	3
7	—	2.50	2・3	3	2
8	—	4.00	3・5	5	3
9	—	3.50	3・4	4	3
10	—	3.50	3・4	4	3
11	—	4.50	4・5	5	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	4.00	3・5	5	3
14	—	3.50	2・5	5	2
15	—	4.00	4	4	4
16	—	5.00	5	5	5
17	—	4.00	3・5	5	3
回答者数	—	2

受講生の傾向

回答者数が2なので一般的な傾向にまで触れられないが、2名とも出席もよく、課外の作業もよくしていたように思う。Q7はホワイトボード等は使わず、ドロップボックスを使用しての講義形態であった。設問の意味(特に「等」)を正しく理解していないようにも思えた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

参加者が今年も少ないので、個人個人の関心確かめつつ、具体的な自治体を例にとって講義を進めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度未実施)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

履修者数による。数名程度の範囲内であれば、個人個人の知識を確かめつつ講義が可能であるが、多くなると、そういった工夫はできにくくなる。なお、次年度は担当しないので、再度担当するときに履修者を見て方針を決める。

科目	監査報告論		
配当年次	1	開講時限	秋金2
受講者数	17	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.55	4.64	5	5	4
2	3.18	3.45	3	5	3
3	4.73	4.55	5	5	4
4	4.82	4.64	5	5	4
5	4.73	4.73	5	5	4
6	4.55	4.55	5	5	4
7	4.45	4.64	5	5	4
8	4.73	4.64	5	5	4
9	4.64	4.73	5	5	4
10	4.45	4.55	5	5	4
11	4.73	4.82	5	5	4
12	5.00	4.91	5	5	4
13	2.27	2.27	1	4	1
14	3.64	3.36	3	5	2
15	4.82	4.64	5	5	4
16	4.82	4.82	5	5	4
17	4.45	4.55	5	5	4
回答者数	11	11

受講生の傾向

選択科目である本科目では、受講生の出席状況(項目12)はほぼ90%を確保し、去年実績に劣らず極めて高い出席率となっており、受講生のモラルも去年と同様に相対的に高いと看做し得る。今期は、これらの傾向が去年に引き続き受講生増加したなかでも見られるため、相対的にモラルの高い受講生と評価できる。ただ、予習時間(項目13)と復習時間(項目14)とも去年に比して維持ないし微減となっている点に問題がある。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度も監査基準の改訂があったため、毎回、パワーポイントによるスライドを追加的に作成・配布するとともに、必要に応じて監査基準の審議資料等を配布し解説を加えた。またスライドの最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するために必要となる参考文献を列挙した。さらにこれら配布資料の全ては、授業当日中に関西大学CEASにアップロードし、授業録画WEB配信を前提とした復習に役立つよう配慮した。

前2回分の理解度を確認するための小テストを、隔週で授業時間の最初に20分程度で実施し、添削して返却すると同時に、成績優秀者の答案を氏名と学生番号を伏せた上で、コピーし全員に配布した。さらに返却時に論点の講評を行なうことで、各自にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるよう心懸けた。これらに加えて、添削に当たって作成した論点表と解答の流れを配布した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今期は配当時限を2限としたことで受講生の増加に繋がったと考えられるため、次期以降も受講しやすい時間帯での開講を行ない、復習課題の任意提出を促す措置を取る必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今期も昨年度に引き続き配当時限を2限としたことで、受講生の増加に繋がったと考えられる。このため、次期以降も受講しやすい時間帯での開講を行ない、復習課題の任意提出を繰り返し促す措置を取る必要がある。

科目	会社法		
配当年次	1	開講時限	秋木1
受講者数	26	回答者数	21

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.71	4.52	5	5	4
2	3.21	3.05	3	4	2
3	4.64	4.67	5	5	3
4	4.86	4.67	5	5	4
5	4.86	4.67	5	5	3
6	4.50	4.67	5	5	3
7	4.43	4.38	5	5	3
8	4.57	4.57	5	5	3
9	4.57	4.57	5	5	3
10	4.29	4.38	4	5	3
11	4.57	4.52	5	5	3
12	4.92	4.90	5	5	4
13	2.21	1.86	1	5	1
14	2.64	2.62	3	5	1
15	4.50	4.14	4	5	1
16	4.43	4.40	4	5	3
17	4.42	4.20	4	5	2
回答者数	14	21

受講生の傾向

全体の学生数からすると受講者数26人というのは多いと思う。公認会計士試験を受験する学生にとっては必要となる科目であろう。ほとんどの学生は授業にまじめに出席しており熱心に取り組んでいたが、受講にあたって有している会社法の基礎知識には差異がみられ(特に先行する企業法の理解に大きく依存する)、その点では理解度にはばらつきがみられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

これまではレクチャーを主体として、確認小テストとして短答式の問題を扱っていたが、今年度は論文執筆の練習を3回取り入れた。法的な文章作成能力をより高める狙いである。その結果として、最終回の試験を迎えるころには学生によってばらつきはあるが、論文作成能力は向上したように思う。その反面、レクチャーに対する時間配分が難しくなったこともあり、これまで会社法で扱っていた一部内容を上級会社法で扱うということにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

会社法は、隣接する「企業法」や「上級会社法」よりもより広い内容を扱わなければならない。この広い内容を漫然と授業していたのでは、なかなか学生の理解も深まらないし、興味を抱かせるような授業とはならない。そこで、広い内容を扱う中であって、それらを何らかのトピックスでくくって扱うことで、その広い内容をより効率的かつ興味深いものとした。たとえば、株主総会の手続きというものはそのものは単調な授業になりがちであるが、同じ会議対である取締役会の手続きと比較しながら扱うことで、両者の特徴がよりはっきりと表れ、それぞれの理解の助けにもなり、広い内容の授業を扱うに当たっても時間を短縮できる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度にも記載したことであるが、会社法という広い範囲を扱うには工夫が必要である。何らかのトピックスでくくって授業を行うということが、今年度、あまりうまくいかなかったので、来年度はより大きく工夫したい。さらに、文書を作成するという練習を行ったが、これによって会社法を扱うのに少ない時間がさらに圧迫されることにもつながる。「企業法」や「上級会社法」という連携する科目との調整を図りつつ、授業を工夫する必要がある。

科目	コーポレート・ファイナンス論		
配当年次	1	開講時限	秋木2
受講者数	12	回答者数	12

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.25	4	5	3
2	—	3.25	3	5	3
3	—	3.92	3	5	3
4	—	4.33	4	5	3
5	—	4.25	4・5	5	3
6	—	4.17	4	5	3
7	—	4.25	5	5	3
8	—	4.25	4・5	5	3
9	—	4.08	5	5	3
10	—	4.33	4	5	3
11	—	4.58	5	5	4
12	—	4.83	5	5	4
13	—	2.67	3	5	1
14	—	2.42	1	5	1
15	—	4.50	5	5	3
16	—	4.18	4	5	3
17	—	4.00	4	5	3
回答者数	—	12

受講生の傾向

ファイナンスについての興味と関心が深くある学生が多かった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

これまで、ファイナンス系の授業を行う場合、数学で躓く学生がいたので、数学的なことは深く追求せず、その背景となる考え方等を中心に講義した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度未実施)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度と同様、教科書を中心に、数学的な面を避けつつ、基本的な考え方について授業する。

科 目	国際会計基準論		
配当年次	2	開講時限	秋隔水1～2
受講者数	2	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.33	4.50	4・5	5	4
2	3.00	3.50	3・4	4	3
3	4.00	4.50	4・5	5	4
4	4.33	4.50	4・5	5	4
5	4.33	4.50	4・5	5	4
6	4.33	4.50	4・5	5	4
7	4.33	4.50	4・5	5	4
8	4.33	4.50	4・5	5	4
9	4.33	4.50	4・5	5	4
10	4.00	4.50	4・5	5	4
11	4.33	4.50	4・5	5	4
12	4.67	5.00	5	5	5
13	2.67	3.50	2・5	5	2
14	3.00	3.50	2・5	5	2
15	4.00	4.50	4・5	5	4
16	4.33	4.50	4・5	5	4
17	4.00	4.50	4・5	5	4
回答者数	3	2

受講生の傾向

受講生は2名であるが、両者とも積極的かつ真摯に受講しており、講義中のディスカッションも活発であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

資料の事前配布とともに、講義内容の理解を深めるため、適宜具体例を提示し、それに基づくディスカッションを行うなどして、より理解しやすくなるようつとめた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

講義で紹介する基準のポイントと基準本文の詳細な理解とを両立できるような資料作りを検討したい。また、資料の事前配布にもかかわらず、予習時間が短いので、小テストに反映するなどの工夫を講じるつもりである。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度の授業においてディスカッションが活発であったことから、同様の工夫を実施しつつ、学生の理解度を高める資料作成と授業展開に工夫を講じるつもりである。

科 目	コストマネジメント論		
配当年次	2	開講時限	秋金3
受講者数	7	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.38	4.86	5	5	4
2	3.00	3.14	3	4	3
3	4.38	5.00	5	5	5
4	4.38	5.00	5	5	5
5	4.38	5.00	5	5	5
6	4.25	4.86	5	5	4
7	4.38	5.00	5	5	5
8	4.38	5.00	5	5	5
9	4.25	5.00	5	5	5
10	4.25	4.71	5	5	3
11	4.25	5.00	5	5	5
12	4.75	4.71	5	5	4
13	2.00	3.29	5	5	1
14	2.00	3.14	3	5	1
15	4.00	4.86	5	5	4
16	3.88	4.71	5	5	4
17	3.88	4.67	5	5	4
回答者数	8	7

受講生の傾向

全般的に、積極的に講義に参加するとともに、質問も積極的な受講生が多かった。そのため、授業への参加を促進するような取り組みを行う必要性は非常に少なかった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年の段階で、ある程度高い評価であったと考えていたため、昨年度を踏襲するように心がけた。さらに、受講生に対して、本講義の各トピックの含意を伝えるように心がけた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

昨年度からは、大きく講義方法を変えていないため、全般的な評価は昨年度と同程度と認識している。しかしながら、本年度は、設問15、設問16、設問17の評価が下がったため、今後の改善の必要を感じている。また、前述の各設問の評点では、いずれも最頻値が2つ表示されており、受講生の評価が割れていることが予想される。既に十分な能力のある受講生に対しての触発となるような要素と、十分に理解できていない受講生へのフォローという2点を、同時に達成することは困難であろうが、改善できるよう取り組む必要性を感じている。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回は非常に高い評点であったため、この内容を継続できるように講義を進めていくつもりである。また、本講義の予習および復習については、改善されているとはいえ、さらに意識付けを行うつもりである。

科目	租税法理論		
配当年次	2	開講時限	秋金3
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	5.00	5	5	5
2	3.00	5.00	5	5	5
3	4.50	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	4.50	5.00	5	5	5
7	5.00	5.00	5	5	5
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	5.00	5	5	5
10	3.50	5.00	5	5	5
11	5.00	5.00	5	5	5
12	4.50	5.00	5	5	5
13	3.50	5.00	5	5	5
14	2.00	5.00	5	5	5
15	5.00	5.00	5	5	5
16	4.50	—	—	—	—
17	4.00	—	—	—	—
回答者数	2	1

受講生の傾向

受講生は1名で、租税法に強い関心を持っていた。例えば、各講義の課題レポートでは、毎回図を用いて租税判例を記述していただけて、その内容に関する質疑応答も十分にこなせていた。また、講義内で消化できなかった過去問についても、次回講義時にペーパーに解答を書き入れ、提出することもあった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生が1名であったので、課題レポートとして提出させる判例数を増やす代わりに、講義内で多くの判例を示し、その内容に関する質疑応答を繰り返す方法を採用した。また、小テストも同様の理由から採用せず、代わりに過去問の解答を実際に記載させ、それを添削する方法を採用した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

租税訴訟の増加により、講義で取り上げるべき租税判例はどうしても増えていかざるを得ないため、受講生の予習は欠かせない。そこで、課題レポートとして要約すべき租税判例の数を増やす。なお、受講生の負担軽減のため、要約すべき租税判例において要求される条文の内容については、事前に情報提供を行う。また、小テストについては、租税法総論だけでなく、所得税法も行うようにし、受講生の学習インセンティブの向上を図りたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生との質疑応答において、根拠となる条文が出てないことが多かった。この点を改善するため、条文集を頼りに過去問の解答を実際に書かせることを講義時間内により多く取り入れる。

科目	監査事例研究		
配当年次	1	開講時限	秋水1
受講者数	21	回答者数	18

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.33	4・5	5	3
2	3.00	3.11	3	5	3
3	4.50	4.33	4	5	3
4	4.25	4.44	5	5	3
5	4.50	4.44	5	5	3
6	4.50	4.56	5	5	3
7	4.50	4.28	4	5	3
8	4.75	4.50	5	5	3
9	4.00	3.89	4	5	3
10	3.25	4.39	5	5	3
11	4.50	4.33	5	5	3
12	5.00	4.67	5	5	4
13	2.50	2.56	2	5	1
14	1.75	2.17	1	5	1
15	4.25	4.00	3・4・5	5	3
16	4.50	4.33	5	5	3
17	4.75	4.29	4	5	3
回答者数	4	18

受講生の傾向

受講生は非常にまじめで、ほぼ全員が毎回出席している状況でした。積極的に発言する人は限られていましたが、プレゼンをする機会を均等に与えたことと、リーダーシップを発揮する学生に触発されて他の学生も積極的にディスカッションに参加していました。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は担当者が異なりますが、今年度は直近の事例を取り上げて紹介する工夫をしました。また、学生の意見をまず聞いて、それに対するコメントを行うことで学生の思考力、アピール力、論理構成力を高める工夫をしました。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(授業担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

試験準備をしている受講生にとって受験勉強の負担にならないよう授業の予習、復習について時間をあまりかけないように授業した結果がそのままアンケート結果として出ていると思います。ただ、今回は事前準備がある程度必要で、その知識の上で参加型の授業を展開しましたので、予習時間は多少必要だったと思います。学生に、この授業を通じてさらに深く勉強したいと思ってもらえるよう、ここで学んだことが今後どのように発展できるのかのヒントを交えながら講義展開をしたいと思っています。

科目	基本監査プログラム演習		
配当年次	1	開講時限	秋火2
受講者数	10	回答者数	8

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.55	4.38	4	5	4
2	3.09	3.25	3	4	3
3	4.64	4.50	4・5	5	4
4	4.73	4.38	4	5	4
5	4.73	4.25	4	5	4
6	4.73	4.38	4	5	4
7	4.64	4.38	4	5	4
8	4.82	4.25	4	5	4
9	4.73	4.25	4	5	4
10	4.64	4.38	4	5	4
11	4.73	4.38	4	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.82	2.13	2	4	1
14	3.00	2.88	3	5	1
15	4.73	4.38	5	5	3
16	4.82	4.50	4・5	5	4
17	4.82	4.29	4・5	5	3
回答者数	11	8

受講生の傾向

昨年度に比して、全体的な評価が下がっており、また受講者数は減少したものの、授業参加度あるいは熱心度を測る出席率(項目12)において、昨年と同様ほぼ100%を達成しているため、非常に熱心な受講生の傾向が見受けられる。また予習時間(項目13)と復習時間(項目14)も昨年度に比して減少したことから、受身的な受講態度であったことが見出せる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度は監査実施に関する監査基準改訂はなかったため、従来のもを改訂したパワーポイントによるスライドと、必要に応じて監査基準や実務指針、意見書等を用意し、配布した上で、監査報告と実施に関する重要論点を確実に講義の前半で押さえるようにした。このように前半においては、監査実施プロセスについてテキストと配布資料に基づいて授業を行ない、後半に、監査プログラムを用いたコンピュータ監査を実体験させた。これら前半の資料については、授業の都度、関西大学CEASにアップロードし復習の用に供した。前半に用いたスライドの最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するために必要となる参考文献を列挙した。

また前半の講義過程において、学生側の能動的な参加を促すため、質疑応答を頻繁に行ない成績評価に反映させた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今年度に引き続き、学生の能動的参加を促す措置として、講義途中における適時かつ頻繁な質問提起を行ない、それらに対する学生からの回答とその根拠を引き出すように心懸けたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度に引き続き、学生の能動的参加を促す措置として、講義途中における適時かつ頻繁な質問提起を行なうだけでなく、期中・期末の課題レポートの作成指導を行なう必要がある。

科目	ディスクロージャー実務		
配当年次	2	開講時限	秋土1
受講者数	9	回答者数	9

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.22	5	5	1
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.25	4.67	5	5	3
4	4.50	4.78	5	5	3
5	4.50	4.89	5	5	4
6	4.50	4.78	5	5	3
7	4.50	4.89	5	5	4
8	4.50	4.78	5	5	4
9	4.50	4.56	5	5	3
10	4.50	4.89	5	5	4
11	4.75	4.63	5	5	3
12	4.25	4.67	5	5	4
13	2.50	2.11	1・2	4	1
14	2.50	2.44	2	5	1
15	4.50	4.67	5	5	3
16	4.50	4.67	5	5	3
17	4.50	4.63	5	5	3
回答者数	4	9

受講生の傾向

公認会計士試験受験者、留学生、社会人経験者、税理士志望者、一般企業への就職希望者等、受講生の知識レベルや目的意識に相当のバラツキが認められた。ただし、全体的に真面目な受講生が多く、積極的に討議に参加してくれたと思います。

特に、実務で苦慮した事例等を披露すると、非常に興味を示してくれました。全体としてレベルは高かったと評価しております。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

基本的な制度概要についてはレジメを用意して、事案の基礎知識を講義の前半でレクチャーしました。応用として、テーマとなる開示事例等について、上場会社のHPにアクセスし、実際の開示事例や新聞報道を比較する等で多角的に事例検討を行うように留意しました。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今回の方針（ディスクロージャーは会計だけの問題ではないこと、会計上のディスクロージャーの異同について、基本的な考え方を議論させる等、考える授業）を維持するとともに、統合報告についてより深く突っ込んだ授業とディスカッションを行う。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

ディスクロージャーに対する基本的な考え方をレクチャーし、実際の開示事例等を通じ、本来あるべきディスクロージャーの姿を考える機会を提供したいと考えています。事例ごとに適正な開示情報は異なるものなので、「模範解答はない」というスタンスで、考える力を身に付けてもらえるよう工夫したいと考えています。受講生の目的が多様であることから、講義時間内で完結し、予習・復習は強制しない方針で講義を進める予定です。

科 目	実践会計プログラム演習		
配当年次	2	開講時限	秋土2
受講者数	12	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.09	3	4	3
3	—	4.91	5	5	4
4	—	4.91	5	5	4
5	—	4.91	5	5	4
6	—	4.91	5	5	4
7	—	4.91	5	5	4
8	—	4.91	5	5	4
9	—	4.91	5	5	4
10	—	4.64	5	5	3
11	—	4.90	5	5	4
12	—	4.82	5	5	4
13	—	2.82	3	5	1
14	—	3.00	3	5	1
15	—	4.82	5	5	4
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	11

受講生の傾向

今年度の受講生は12名と多数であったこと、パソコンの操作能力に相当の差があったため、円滑な講義の実施が危ぶまれましたが、課題をクリアした受講生が、作業の遅れている受講生の手助けをする等、非常に協調性が高かったため、概ね予定していた到達度に達することができたと思います。非常に明るい受講生が多く、講師のミスを遠慮なく指摘してくれる等、積極的に講義に参加してくれる受講生が多かったと思います。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は、パソコンの操作が不得手な受講生が多く、実践的な演習に入ることが難しかったので、今年度は、最初にパソコンの基本的な操作能力を確認してから実践演習に入ることになりました。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生のパソコンの操作能力を見極め、できるだけ実践的な講義を行いたいと思います。席は固定化する傾向があるので、受講生の相互補助関係を重視し、共育的な講義を実践したいと考えています。実践的、かつ、積極的な討論を行えるような教材の提供を用意する予定です。

科 目	ソリューション・イン・アカデミック(坂口クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋水3
受講者数	6	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.50	5	5	3
2	—	3.17	3	4	3
3	—	4.50	5	5	3
4	—	4.50	5	5	3
5	—	4.50	5	5	3
6	—	4.50	5	5	3
7	—	4.50	5	5	3
8	—	4.50	5	5	3
9	—	4.50	5	5	3
10	—	4.50	5	5	3
11	—	4.67	5	5	4
12	—	4.83	5	5	4
13	—	2.17	1	4	1
14	—	2.33	1・3	4	1
15	—	4.50	5	5	3
16	—	4.50	5	5	3
17	—	4.50	5	5	3
回答者数	—	6

受講生の傾向

おおむね熱心な学生が多かった。ただし、管理会計について専門的な知識を習得しているレベルは、学生間で大きな差が見受けられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

学生の習熟度の差をカバーするため、前半の授業では、基本的な教科書を使って管理会計のトピックについて議論した。また、授業の後半では、架空の企業ケースを使って、管理会計の視点からディスカッションを行い、それぞれの興味関心に対応するようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も、受講生の状況に応じて、一方向的なレクチャーではなく、双方向的なディスカッションを中心に授業を組み立てていきたいと考えている。

科目	ソリューション・イン・アカデミック(松本クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋木5
受講者数	2	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.00	4	4	4
2	4.00	3.00	3	3	3
3	5.00	4.50	4・5	5	4
4	5.00	4.00	4	4	4
5	4.67	4.50	4・5	5	4
6	5.00	4.00	4	4	4
7	4.67	3.00	2・4	4	2
8	5.00	5.00	5	5	5
9	4.33	3.50	2・5	5	2
10	5.00	4.00	4	4	4
11	5.00	4.50	4・5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	5.00	5.00	5	5	5
14	3.33	3.00	1・5	5	1
15	5.00	4.50	4・5	5	4
16	5.00	4.50	4・5	5	4
17	5.00	5.00	5	5	5
回答者数	3	2

受講生の傾向

受講生の授業参加度あるいは熱心度を測る出席率(項目12)において、ほぼ100%を達成しており、また演習のための予習(項目13)は昨年通りであるものの、復習(項目14)時間が減少している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

演習最初の段階で学生からの希望を聴取し、監査論に関する諸論点を自主的に解答させ、演習時間中に全員で検討する形態とした。このため担当者個々が課題に対する分析・資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを行なえるように、複数の課題を事前に配布した。この結果、受講生も予習時間(項目13)と復習時間(項目14)にかなりの時間を割いていることが判る。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

各自にパワーポイントを利用した資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを求めたが、自分以外の報告者による報告に対する議論が比較的乏しいと感じられたため、他者に対する関与度を高めるための方策を採る必要がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

演習生同士の討議や検討の時間がなかなか持てないため、問題となる点を予め探索させておくような措置が必要と思われる。

科目	ソリューション・イン・アカデミック(三島クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋木5
受講者数	4	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.00	4.75	5	5	4
2	3.00	3.50	3	5	3
3	5.00	4.75	5	5	4
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	5.00	5	5	5
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	4.75	5	5	4
10	5.00	4.75	5	5	4
11	5.00	4.75	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	3.00	3.25	5	5	1
14	2.00	3.25	5	5	1
15	5.00	4.75	5	5	4
16	5.00	4.67	5	5	4
17	5.00	4.67	5	5	4
回答者数	1	4

受講生の傾向

今年度は受講者数は4人で、ソリューション授業としては適正人数であると思う。それぞれの学生が真面目に出席し、かつ予習・復習もしっかりと行われていた。授業の中でも、活発な意見が交わされるなど、全員が主体的に授業に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の1人という受講者と違って、4人ということもあり、それぞれの学生の希望および学力などを勘案して、授業を行うよう心掛けた。ゼミ形式であるので、学力の差異については個別に対応することが可能であった。また、対話においても、なるべく企業法の基礎的な考え方、または習得した知識を活用して、そこから企業法に関する問題の解決方法を導き出せるようになることを配慮して授業を進めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

今回は受講生が一人であったが、一人の場合特有であるが、その学生のレベルや目的に合わせて、完全に学生にマッチした授業を展開することができる。今後は、学生が2人以上となった場合であったとしても、極力学生のレベルや目的に合わせて授業ができるようにしたい。その前提として、今後はもっと多くの受講生に授業に来てもらいたいと思う。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

ソリューションという授業は、受講生の受講目的や学力・レベルに応じて対応しなければならない。学生数が4人であれば対応できる人数であるが、これよりも多くなったり、目的・学力に差異があるようであれば、授業で扱う題材やその進め方など一層の工夫が必要であるが、場合によっては、授業内での個別対応では限界があるときなど、クラスを分けるなどの工夫が必要であろう。

科目	ソリューション・イン・アカデミック(清水クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋木5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	4.00	4	4	4
3	—	4.00	4	4	4
4	—	4.00	4	4	4
5	—	4.00	4	4	4
6	—	4.00	4	4	4
7	—	4.00	4	4	4
8	—	5.00	5	5	5
9	—	4.00	4	4	4
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	3.00	3	3	3
14	—	2.00	2	2	2
15	—	3.00	3	3	3
16	—	4.00	4	4	4
17	—	4.00	4	4	4
回答者数	—	1

受講生の傾向

1名の受講であった。公務員志望とのことで、採用試験への対策を期待していたようであったが、基礎的な学力が不足していたため、教科書及び演習問題を使っでの授業となった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年は受講生がなかったため、アンケート結果はない。今回は1人受講であったため、受講生の学力に合わせた演習内容と速度を心掛けた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

財務会計の主な項目は一通り解説したが、十分な理解度には到達できなかったのが反省点である。今後は、理解度をより確認しながら進めていく必要がある。

科 目	ソリューション・イン・アカデミック(宗岡クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋土5
受講者数	6	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.17	4	5	4
2	—	3.17	3	4	3
3	—	4.50	5	5	3
4	—	4.33	5	5	3
5	—	4.50	4・5	5	4
6	—	4.17	4	5	3
7	—	4.33	4	5	4
8	—	3.83	3	5	3
9	—	3.83	4	5	3
10	—	4.17	4	5	3
11	—	4.17	4	5	3
12	—	4.33	5	5	2
13	—	1.17	1	2	1
14	—	1.17	1	2	1
15	—	4.17	4	5	3
16	—	4.17	4	5	3
17	—	4.17	5	5	3
回答者数	—	6

受講生の傾向

経営にかかる課題について、さまざまな年代の方と協働して議論を行って、結論を導き出していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

経営についてはまったく経験がないが、社長を含めた経験者と一緒に共同作業を行わせることにより、その意識や考え方を感じ入ってもらうようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回は、経営について学習したが、受講者の希望に沿って、最善のコンテンツを提供するようになりたい。

科 目	ソリューション・イン・エキスパートイズ(柴クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋月5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	2.00	2	2	2
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

受講者・回答者が1名なので、まじめな、特定個人の資質に影響された結果です。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと
授業は特定個人の関心事項に合わせて行っている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」
該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」
次年度も同様の対応を行う。

科 目	ソリューション・イン・エキスパートタイズ(宗岡クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋火5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	2.00	2	2	2
14	—	2.00	2	2	2
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

経営にかかる課題について、さまざまな年代の方と協働して議論を行って、結論を導き出していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

経営についてはまったく経験がないが、社長を含めた経験者と一緒に共同作業を行わせることにより、その意識や考え方を感じ入ってもらうようにした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度未実施)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回は、経営について学習したが、受講者の希望に沿って、最善のコンテンツを提供するようになりたい。

科 目	ソリューション・イン・エキスパートタイズ(清水クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋火5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.00	4	4	4
2	—	3.00	3	3	3
3	—	3.00	3	3	3
4	—	4.00	4	4	4
5	—	4.00	4	4	4
6	—	4.00	4	4	4
7	—	3.00	3	3	3
8	—	4.00	4	4	4
9	—	4.00	4	4	4
10	—	5.00	5	5	5
11	—	4.00	4	4	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	4.00	4	4	4
14	—	1.00	1	1	1
15	—	4.00	4	4	4
16	—	4.00	4	4	4
17	—	4.00	4	4	4
回答者数	—	1

受講生の傾向

既に社会人となっている学生1名のみが受講生であった。授業に前向きであり、基礎的な知識は修得していたため、演習も進め易かった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

既に社会人となっている学生1名のみが受講生であった。これまで実務で行ってきたことについて理論的に確認したいとの希望があったため、できる限りそのニーズに合わせるよう務めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も受講生の希望に応じた授業(演習)内容を心がけていく。

科 目	ソリューション・イン・エキスパートタイズ(松本クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋金5
受講者数	3	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	4.00	3・4・5	5	3
14	—	2.67	2	4	2
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	3

受講生の傾向

会計研究科最終の半年間の演習ということもあり、出席割合(項目12)は全員がほぼ100%となっており、極めてモラルの高い傾向が見出せる。全員が公認会計士を志望したこともあり、予習(項目13)・復習(項目14)ともに時間を確保していることが判る。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

最終的な演習ということもあり、より実践的な演習とするために監査論の諸論点を網羅的かつ総合的に扱った。受講生には、当該問題への解答を事前に準備させることで、演習時には復習とともに全員による相互検証の機会とした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

公認会計士志望の受講生に対しては、いかに論文作成能力を高めるか、という観点からの解答の準備と相互検証に加えた、演習指導が必要と思われる。

科目	ソリューション・イン・エキスパートタイズ(三島クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋火5
受講者数	2	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	4.50	4・5	5	4
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	4.00	3・5	5	3
14	—	3.00	1・5	5	1
15	—	4.50	4・5	5	4
16	—	4.50	4・5	5	4
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	2

受講生の傾向

私としては、本授業を担当するのは初めてであったが、今年度は2人の受講者があった。授業にはすべて出席しており、予習・復習も丁寧に行われていた。また、授業進捗やレベルについてもちょうど良いようであった。さらに、2人の受講生とも目的意識を明確にもっており、授業に対して真面目にかつ熱心に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今回の授業では、受講生2人の受講目的が全く異なっていたので、2クラスに分けて授業を行った。教員の授業負担が重くなるという点もあるが、一つの授業に目的の違う学生がいる場合には、無理に両者に共通するようなテーマや課題を扱ったのでは、かえって中途半端になってしまうからである。その甲斐もあって、両受講者の授業満足度は高いようであった。2人を2クラスに分けたので、結局1対1の授業となったが、受講生の目的・レベル・進捗に合致した授業を行うことができた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

ソリューション・イン・エキスパートタイズは、ソリューションの中でも2年秋学期という最後のソリューションとなり、受講生のキャリア設計等が受講目的として明確に反映されるようになる。受講生の受講目的やその背景にあるキャリア設計などを丁寧に聞き取り、それに合致した授業を行うよう心がけねばならない。今年度はクラス分けで対応したが、そのような対応も難しくなることもあるので、事前に学生と相談のうえ、方針を決めて授業を進めなければならない。

科 目	ソリューション・イン・エキスパートイズ(大西クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋金5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	3.00	3	3	3
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

受講生は1人であった。まじめに出席するとともに、課題にも積極的に取り組んだ。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は不開講であったが、管理会計の中心的概念であるマネジメントコントロールに関する理解を促進できるように留意した。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

評点は極めて高く、講義の反応も良かったと考えている。ただし、評点については受講生が1人であることに留意する必要があると考えられる。

科 目	ソリューション・イン・エキスパートイズ(富田クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋火5
受講者数	3	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.67	5	5	4
2	—	3.67	3	5	3
3	—	4.67	5	5	4
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	4.67	5	5	4
7	—	4.33	4	5	4
8	—	5.00	5	5	5
9	—	4.67	5	5	4
10	—	4.00	3・4・5	5	3
11	—	4.67	5	5	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	3.67	4	4	3
14	—	3.33	2・3・5	5	2
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	3

受講生の傾向

3名の受講生全員が、欠席も遅刻もなく、積極的に受講していた。また、講義時間中も課題を深くまで行い、ディスカッションも積極的に実施していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は担当していないため、昨年度の授業評価アンケートを踏まえることはできないが、講義の目的・学習の到達目標を明確にすることで、学生の学習モチベーションを高めるようにつとめた。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

来年度の担当は予定されていないため、「今後の対応」ではないが、再び担当する場合、学習の深度がより深まるような課題の提示やディスカッションの行い方や論点などの工夫を講じてみたい。

科 目	論文指導・修士論文(基礎)(中村クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋金5
受講者数	4	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.33	5	5	3
2	—	3.67	3	5	3
3	—	4.67	5	5	4
4	—	4.67	5	5	4
5	—	4.33	5	5	3
6	—	4.33	5	5	3
7	—	4.33	5	5	3
8	—	4.33	5	5	3
9	—	4.33	5	5	3
10	—	4.67	5	5	4
11	—	4.33	5	5	3
12	—	5.00	5	5	5
13	—	4.33	5	5	3
14	—	2.33	1	5	1
15	—	4.67	5	5	4
16	—	4.33	5	5	3
17	—	4.00	3・4・5	5	3
回答者数	—	3

受講生の傾向

受講生の関心は、主に会計や会社法と租税法がクロスする問題にあった。受講生は当初、レジユメを作成して報告することに慣れていなかったが、各自3回の報告を経験した結果、レジユメやプレゼンのレベルは上がってきた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生のレジユメには引用がなく、また、インターネットから内容をあまり確認することなく使用する傾向があったため、それらの点について毎回注意を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生には必ず発表レジユメを作成させる。なお、レジユメの記載には、必ず引用を付けさせる指導をする。また、本年度と同様、租税法論文の作成に必要な事項を毎回レジユメを作成して講義内で説明する。

科目	論文指導・修士論文(実践)(柴クラス)		
配当年次	2	開講時限	通年木5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

受講者・回答者が1名なので、まじめな、特定個人の資質に影響された結果です。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと
授業は特定個人の関心事項に合わせて行っている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」
該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」
次年度も同様の対応を行う。

科 目	論文指導・修士論文(実践)(中村クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋月4~5
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

毎回、発表レジュメを作成し、経過報告を行うなど、非常に真摯に取り組んでいた。また、英文に関するもきちんと訳出し、それをレジュメに取り込むことができていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の特徴として、レジュメの報告が長く、内容が不明瞭になる傾向があったので、各回の報告の目的や狙いを必ず事前に確認した上で、受講生に報告を行わせた。また、レジュメの記載内容に引用もれが多かったため、その点は繰り返し指摘した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生には必ず発表レジュメを作成させる。なお、レジュメの記載には、必ず引用を付けさせる指導をする。

科目	修士論文(柴クラス)		
配当年次	2	開講時限	通年他
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

受講者・回答者が1名なので、まじめな、特定個人の資質に影響された結果です。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと
授業は特定個人の関心事項に合わせて行っている。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」
該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」
次年度も同様の対応を行う。

科 目	修士論文(中村クラス)		
配当年次	2	開講時限	秋他
受講者数	1	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	5.00	5	5	5
13	—	5.00	5	5	5
14	—	5.00	5	5	5
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	1

受講生の傾向

解釈論に関心があり、民法や会社法を手がかりに損害賠償請求権に関する租税判例を研究してきた。また、研究途中からはアメリカ法に取り組むなど、最後まで修論の作成に真摯に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生が私見として主張する箇所 (something new) については、先行研究との違い等、繰り返しその内容を質問し続けた。また、アメリカ法のルーリングの内容については、論文内に図を多用させ、取引内容の理解を図のイメージから把握できるよう指導した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

修士論文の完成に資するため、中間報告、最終報告を行わせ、他者のアドバイスを受ける機会を設ける。

科目	特殊講義(経営と会計)		
配当年次	1	開講時限	秋木3
受講者数	14	回答者数	14

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.43	5	5	3
2	3.22	3.00	3	3	3
3	4.67	4.57	5	5	2
4	4.44	4.43	5	5	2
5	4.33	4.43	5	5	3
6	4.44	4.57	5	5	2
7	4.22	4.36	5	5	2
8	4.44	4.57	5	5	3
9	4.11	4.07	5	5	2
10	4.00	4.43	5	5	3
11	4.00	4.50	4・5	5	4
12	4.33	4.93	5	5	4
13	2.22	2.50	2	5	1
14	2.22	2.57	1・3	5	1
15	3.89	4.50	5	5	3
16	4.22	4.50	5	5	3
17	4.33	4.43	5	5	3
回答者数	9	14

受講生の傾向

受講生14名中、出席回数15回6名、14回6名、13回と12回が各1名と良好であった。一方、質問の機会を設けても自発的な質問は少なく、できるだけ全員に発言させるようにしたが、消極的で、中には何を質問したらいいかわからないという学生もいるなど、昨年同様に授業の質や進度に気を遣わざるを得なかった。しかし、レポート作成のために一昨年から実施してきた事前テーマ発表は効果があり、最終のレポートは昨年と同程度以上と評価できた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

アンケートの結果から、授業に係る満足度(設問11)、触発(同15)、知識・能力の向上(同16)、規模(同10)、予習・復習(同13・14)、等の評点が上昇している。受講生の消極性や受身の姿勢はひしひしと感じていたが、授業で取り上げる事例を少し絞りこんで時間的な余裕を持ち、より対話型の授業を心がけたことがそれなりに効果を上げたと考えている。具体的には①授業においてできるだけ全員に発言させるようにしたこと、②「受講者によるレポート・テーマ発表」の2回の授業を充実させたこと、③授業の当初からレポート(自由論題)のテーマ検討を促したことなどである。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

学生の問題意識や理解度の差は今後も変わらないと見込まれることから、授業で取り上げる事例をもう少し絞りこんで、より対話型の授業とし、興味を持たせることで消極性や受身の姿勢を改善し、レポートに現れる理解力・論理性の個人差や努力不足などネガティブな問題点を少しでも克服できるようにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き対話型の授業を心がけ、興味を持たせることで消極性や受身の姿勢を改善し、授業の効果を高めたい。

科目	特殊講義(グローバル化と会計)		
配当年次	1	開講時限	秋金3
受講者数	12	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.55	5	5	3
2	—	3.00	3	3	3
3	—	4.64	5	5	3
4	—	4.55	5	5	3
5	—	4.55	5	5	3
6	—	4.64	5	5	3
7	—	4.55	5	5	3
8	—	4.45	5	5	3
9	—	4.20	5	5	3
10	—	4.64	5	5	3
11	—	4.64	5	5	3
12	—	4.73	5	5	4
13	—	2.64	1・3	5	1
14	—	2.18	1	4	1
15	—	4.36	5	5	3
16	—	4.36	5	5	3
17	—	4.27	5	5	3
回答者数	—	11

受講生の傾向

受講生12名中1名は病気のため続けて受講できなかったため実質11名の受講であった。11名中、出席回数15回4名、14回3名、13回1名、12回2名、10回が1名と概ね良好であった。一方、質問はできるだけ全員に発言させるようにしたこともあり、一人当たり平均3~4回とまずまずであり、グループ討議を入れたことも相俟って、授業への参加意欲は感じられた。最終のレポートは概ね授業への参加状況を反映していたが論理性と努力に個人差が見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

新設科目であったが、他の科目の経験から受講生の消極性や受身の姿勢への対処が必要と考え、対話型の授業を心がけた。具体的には①授業においてできるだけ全員に発言させるようにしたこと、②体験をベースとしたゲストによる講義(第12回)やグループ討議(第13回)を入れたこと、③「受講者によるレポート・テーマ発表」の2回の授業を充実させたこと、④授業の当初からレポート(自由論題)のテーマ検討を促したことなどである。アンケートの結果から、授業に係る満足度(設問11)、触発(同15)、知識・能力の向上(同16)、理解(同17)等の評価から、意図した効果はあったと考える。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

対話型の授業を心がけ、興味を持たせることで消極性や受身の姿勢を改善し、授業の効果を高めたい。

科目	国際公会計制度論		
配当年次	2	開講時限	秋水1
受講者数	2	回答者数	2

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	5.00	5	5	5
2	—	3.00	3	3	3
3	—	5.00	5	5	5
4	—	5.00	5	5	5
5	—	5.00	5	5	5
6	—	5.00	5	5	5
7	—	5.00	5	5	5
8	—	5.00	5	5	5
9	—	5.00	5	5	5
10	—	5.00	5	5	5
11	—	5.00	5	5	5
12	—	4.50	4・5	5	4
13	—	2.50	2・3	3	2
14	—	2.00	2	2	2
15	—	5.00	5	5	5
16	—	5.00	5	5	5
17	—	5.00	5	5	5
回答者数	—	2

受講生の傾向

公会計に関心のある2名の学生が受講した。2名とも、公会計に係る知識は殆ど持っておらず、英語の解読にも困難が伴ったが、理解に向けて真面目に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生に対して興味を引くようなトピックを引用した。またそれぞれのテーマに沿った実際の海外の先進的な会計事例を配布し、我が国の実務等との比較を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

我が国の公会計の進展はうまく進まず、国際公会計基準や先進的な海外諸国の実務と比べても見劣りするところがある。将来、公会計の進展を担う可能性のある受講生に対して、なぜ公会計の進展が必要なのかについては、公共管理の観点から説明していきたい。

科 目	法人税法		
配当年次	2	開講時限	秋火4
受講者数	4	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.38	4.50	4・5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.50	5.00	5	5	5
4	4.63	4.75	5	5	4
5	4.63	5.00	5	5	5
6	4.50	4.50	4・5	5	4
7	4.13	4.50	4・5	5	4
8	4.63	4.75	5	5	4
9	3.88	4.50	4・5	5	4
10	4.25	4.75	5	5	4
11	4.50	4.50	4・5	5	4
12	4.50	5.00	5	5	5
13	3.13	3.75	3	5	3
14	2.50	3.00	2	5	2
15	4.50	4.50	4・5	5	4
16	4.38	4.75	5	5	4
17	4.29	4.50	4・5	5	4
回答者数	8	4

受講生の傾向

質問No.13及びNo.14の結果が示す通り、今年度の受講生は非常に真摯に取り組んでいた。また、講義も教員からの講義一辺倒のスタイルではなく、院生からの質問や院生間の質疑応答が頻繁に行われ、非常に良い学習環境であったと思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

条文集を使って、事前に情報提供を行い、租税判例に関する課題レポート作成のサポートを行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

租税判例を要約する困難さを解決するため、要約する際のポイントとなる条文の内容について、事前に情報提供を行うようにする。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生は、質疑応答において根拠条文がなく結論を導く場面が見られた。この点を改善するため、条文集を利用して過去問の解答を実際に書かせるようにする。

Ⅱ-(3). 2015 年度授業評価アンケート(系平均)結果概要

系： 財務会計
 受講者数 205 回答者数 182

質問No.	昨年平均	今年平均	上級簿記A1	上級簿記A2	上級簿記B	上級財務会計論A1	上級財務会計論B	会計基準論	会計制度論	財表作成簿記	会計事例研究	会社経理実務	国際会計基準論	ディスクロージャー実務	会計戦略論	資産会計論	負債・資本会計論
1	4.44	4.40	4.64	4.75	4.80	4.45	4.43	4.10	3.89	4.45	4.18	4.56	4.50	4.22	4.40	4.60	4.00
2	3.24	3.26	3.27	3.50	3.50	3.25	2.86	3.10	3.22	3.57	3.27	3.00	3.50	3.00	3.00	3.60	3.25
3	4.32	4.34	4.64	4.42	4.90	4.20	4.00	3.95	3.89	4.38	4.09	4.50	4.50	4.67	4.20	4.80	4.00
4	4.41	4.35	4.55	4.25	4.50	4.25	4.43	4.15	3.93	4.33	4.09	4.56	4.50	4.78	4.00	4.40	4.50
5	4.38	4.39	4.55	4.00	4.80	4.35	4.43	4.20	4.26	4.29	4.36	4.44	4.50	4.89	4.40	4.20	4.25
6	4.32	4.26	4.55	4.25	4.70	4.35	4.00	3.80	3.22	4.19	4.36	4.44	4.50	4.78	4.40	4.40	4.00
7	4.31	4.30	4.64	4.33	4.70	4.20	4.00	4.00	4.04	4.24	4.09	4.44	4.50	4.89	4.60	4.40	3.50
8	4.41	4.39	4.27	4.33	4.70	4.35	4.29	4.00	4.00	4.43	4.18	4.56	4.50	4.78	4.20	4.80	4.50
9	4.24	4.11	4.27	3.67	4.20	4.40	3.71	4.00	3.67	3.76	3.82	4.33	4.50	4.56	3.80	4.20	4.75
10	4.30	4.37	4.45	4.33	4.40	4.40	4.71	4.30	3.96	4.24	4.36	4.50	4.50	4.89	4.00	4.00	4.50
11	4.39	4.33	4.73	4.25	4.50	4.55	4.14	4.20	3.70	4.10	4.00	4.39	4.50	4.63	4.80	4.00	4.50
12	4.77	4.87	4.91	4.92	4.80	4.90	5.00	4.75	4.96	4.95	4.82	4.78	5.00	4.67	5.00	4.60	5.00
13	2.21	2.50	2.36	1.50	2.80	2.50	2.43	2.50	2.22	1.95	2.36	2.94	3.50	2.11	2.60	2.00	3.75
14	2.64	2.72	3.55	2.42	3.40	2.90	2.43	2.40	2.48	2.62	2.64	2.39	3.50	2.44	3.00	2.40	2.25
15	4.21	4.26	4.45	3.83	4.40	4.15	4.29	3.95	3.59	4.05	4.27	4.39	4.50	4.67	4.40	4.40	4.50
16	4.37	4.33	4.55	3.92	4.60	4.45	4.14	3.83	3.74	4.24	4.27	4.50	4.50	4.67	4.60	4.40	4.50
17	4.19	4.25	4.55	4.17	4.40	4.20	4.17	3.88	3.50	4.05	4.27	4.39	4.50	4.63	4.40	4.40	4.25
回答者数	154	182	11	12	10	20	7	20	27	21	11	18	2	9	5	5	4

受講生の傾向

系の平均として、学生は授業におおむね満足し(質問No.11の4.39)、80%以上出席(質問No.12の4.77)している反面、予習や復習にはあまり時間をかけていない。しかし、それでも、授業に触発されたといい、職業会計人に必要な知識が高まったといい、授業をおおむね理解しているという(質問No.15~17)。ところが、個々の科目において、授業への取り組みのほぼすべての項目で意欲的でない科目がある(会計制度論)。受講生の動向は昨年とほとんど変わらない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年と同様の指摘となる。科目特性があるので、科目の担当者自身による記述を参照されたい。相対的に低評価の基礎的、理論的科目の「今後の対応」を注意されたい。また、今後の対応(工夫や留意した点)が、受講生のニーズに応えているのかや学習効果を向上させるものであるかなどの点も、注意されたい。しかしながら、「授業の評価」の多くの項目について最も低い評価が特定の1科目(会計制度論)に集中しているのが気になる。この科目で工夫されたと書かれた内容の効果が出ていないのが残念である。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

会計事例研究については3年目にやや評価が上がっている。この科目の次年度担当の新規教員に初年度・2年目の対応などをFD委員会から伝える方が良いであろう。また、項目によって低い評価が気になる上級簿記A、上級財務会計論A、会計制度論、会計経理実務については、同一担当者の異なる科目で高い評価になっているので、これら科目で低評価になった理由はそれぞれの担当者が考察されれば良いと思われる。一方、相対的に高い評価を得た上級簿記B、国際会計基準論、ディスクロージャー実務、会計戦略論、負債・資本会計論はいずれも回答数が10未満であることから、受講者の人数と評価の関係を検討してみる価値がある。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度問題とされた会計事例研究に対する相対的に評価が上がっている。ただ、著しく上昇したとまでは言えない。半面、例年と比べて、会計制度論に対する評価が大きく下がっている。教員に変更はないし、講義方法に変更はないので、講義方法の適否を検討した方がよい。FD委員会でも検討の良例となる。また、項目によっては低い評価が気になるその他の科目については、同一担当者の異なる科目で高い評価になっているので、これら科目で低評価になった理由はそれぞれの担当者が考察されれば良いと思われる。一方、国際会計基準論、会計戦略論、資産会計論、負債・資本会計論はいずれも回答数が5未満と少ないことから、受講者の人数と評価の関係を検討してみる価値がある。

系： 管理会計

受講者数： 136

回答者数： 121

質問No.	昨年平均	今年平均	上級原価計算論A1	上級原価計算論A2	上級原価計算論B	上級管理会計論A1	上級管理会計論B	戦略管理会計論	企業分析論	コストマネジメント論
1	4.28	4.59	4.71	4.55	4.62	4.29	4.56	4.48	4.67	4.86
2	3.19	3.36	3.29	3.45	3.38	3.25	3.75	3.41	3.17	3.14
3	4.25	4.45	4.53	4.45	4.77	3.67	4.44	4.44	4.33	5.00
4	4.23	4.49	4.47	4.55	4.85	3.79	4.38	4.54	4.33	5.00
5	4.21	4.50	4.76	4.45	4.54	3.67	4.50	4.58	4.50	5.00
6	4.05	4.46	4.47	4.55	4.54	3.79	4.31	4.46	4.67	4.86
7	4.28	4.48	4.59	4.18	4.69	4.13	4.00	4.42	4.83	5.00
8	4.25	4.56	4.71	4.36	4.62	4.04	4.63	4.46	4.67	5.00
9	4.06	4.40	4.41	4.36	4.31	3.71	4.38	4.50	4.50	5.00
10	4.22	4.42	4.47	4.27	4.46	3.92	4.38	4.50	4.67	4.71
11	4.09	4.46	4.65	4.64	4.31	3.79	4.44	4.54	4.33	5.00
12	4.71	4.83	4.94	4.73	4.77	4.91	4.75	4.85	5.00	4.71
13	2.14	2.42	2.88	1.82	2.38	2.21	2.13	2.65	2.00	3.29
14	2.76	2.80	3.35	2.45	2.69	2.79	2.75	3.04	2.17	3.14
15	4.14	4.32	4.29	4.55	4.23	3.83	4.19	4.42	4.17	4.86
16	4.22	4.40	4.59	4.45	4.33	3.96	4.31	4.50	4.33	4.71
17	4.04	4.32	4.44	4.45	4.25	4.05	4.06	4.32	4.33	4.67
回答者数	66	121	17	11	13	24	16	27	6	7

受講生の傾向

全体的な傾向としては、受講生はおおむね真面目に出席している。しかし、その一方で、各受講生の間で、習熟度のばらつきが大きく存在していると思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の評点が比較的良好であったことから、講義の大きな枠組みは変えずに、細かな改善を積み重ねることを留意した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

授業中に利用する問題やテーマなどの意見交換については効果があったため、今後も進める予定である。また、受講者の全体像に関する動向の把握を通じて、適切な講義および演習の指導ができるように改善を進めたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

科目および開講時期により、評点のばらつきが存在しているが、昨年度に引き続き本年度の評点も比較的良好であったと考えられる。そのため、今後も本年度の取り組みを継続して、適切な講義および演習の指導ができるように改善を進める予定である。

系： 税務会計

受講者数： 18

回答者数： 14

質問No.	昨年平均	今年平均	租税法会計論
1	4.32	3.71	3.71
2	3.16	3.43	3.43
3	4.37	4.07	4.07
4	4.37	3.86	3.86
5	4.53	3.79	3.79
6	4.21	3.71	3.71
7	4.53	3.64	3.64
8	4.53	3.93	3.93
9	4.21	3.50	3.50
10	4.32	4.21	4.21
11	4.26	3.64	3.64
12	4.58	5.00	5.00
13	1.74	1.71	1.71
14	2.42	2.43	2.43
15	4.32	3.57	3.57
16	4.21	3.36	3.36
17	4.05	3.50	3.50
回答者数	19	14	14

受講生の傾向

今年度の受講生は、昨年度に比べ出席状況の点では良かった(質問No.12)ものの、昨年度以上に税務会計の既修者と初学者の学力差が大きかった。このため、他の質問項目の結果は、昨年度よりも悪いものとなっている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

「上級税務会計論」と「租税法会計論」の連動を実施しただけでなく、定期試験と中間試験の併用も実施した。また、「上級税務会計論」の方では、追加の小テストを実施し、受講生の理解に努めた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

「上級税務会計論」と「租税法会計論」の連動、定期試験と中間試験の併用は一定の効果があり、次年度も継続する。なお、受講生に税務会計の勉強時間を増やすよう誘導すべく、追加の小テストも実施したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

「上級税務会計論」と「租税法会計論」の連動、定期試験と中間試験の併用を継続する。また、各科目で取り扱う項目を公認会計士試験の主題頻度に応じたものに対応させる。また、受講生に税務会計の勉強時間を増やすよう誘導すべく、追加の小テストを租税法会計論においても実施したい。

系： 監査
 受講者数：122

回答者数：105

質問No.	昨年平均	今年平均	監査制度論A	監査制度論B	監査基準A	監査基準B	監査報告論	監査事例研究	保証業務論
1	4.42	4.50	4.42	4.33	4.10	5.00	4.64	4.33	4.67
2	3.18	3.26	3.50	3.44	3.17	3.17	3.45	3.11	3.00
3	4.52	4.46	4.46	4.33	4.03	4.67	4.55	4.33	4.83
4	4.26	4.46	4.58	4.33	4.03	4.33	4.64	4.44	4.83
5	4.29	4.48	4.27	4.44	3.97	4.67	4.73	4.44	4.83
6	4.37	4.45	4.35	4.33	4.03	4.83	4.55	4.56	4.50
7	4.43	4.39	4.27	4.44	3.93	4.33	4.64	4.28	4.83
8	4.35	4.43	4.38	4.22	4.10	4.33	4.64	4.50	4.83
9	4.08	4.24	4.46	4.11	3.86	4.17	4.73	3.89	4.50
10	4.22	4.39	4.31	4.00	4.14	4.67	4.55	4.39	4.67
11	4.36	4.45	4.38	4.22	3.86	4.67	4.82	4.33	4.83
12	4.75	4.80	4.85	4.67	4.86	4.67	4.91	4.67	5.00
13	2.31	2.50	2.85	2.56	2.24	2.50	2.27	2.56	2.50
14	2.65	2.72	3.46	2.89	2.52	2.17	3.36	2.17	2.50
15	4.26	4.19	4.04	4.11	3.90	3.83	4.64	4.00	4.83
16	4.37	4.39	4.19	4.11	4.10	4.33	4.82	4.33	4.83
17	4.42	4.32	4.20	4.11	3.92	4.50	4.55	4.29	4.67
回答者数	65	105	26	9	29	6	11	18	6

受講生の傾向

受講生の出席状況(項目12)は、ほぼ90%以上を確保しており、「監査制度」及び「監査基準」という基本科目(必修科目)以外の科目においても、受講生の参加意欲は全体的に極めて高かったと評価できる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義に際して必要な資料を用意・配布するとともに、学生のモラルを向上させるための措置を、全ての科目で講じており、これは2015年度版「出講の手引き」に沿った講義方式である。また2つの基本科目以外は発展科目および応用科目であるため、「監査報告論」「監査事例研究」「保証業務論」のすべてでケース・スタディ形式による学生のプレゼンテーションとディスカッションが組み込まれており、その教育効果もあって全項目で昨年度より改善している。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

出席率を高める措置として出席確認を取る方法を採用する科目もあるが、形式的な出席確認では学生の参加意欲やモラルを高めることには繋がらないため、小テストや課題の実施・添削・返却といった学生の側にも自らの授業参加によって得られた成果が適時に判るような対応が理論科目・実践科目にかかわらず教員には必要である。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度の複数開講の基本科目において、クラスごとの学生による評価の散つきが大きすぎたが、全体的にクラス間の散つきもなくなり安定した教育効果が達成できているように思われる。故に、次年度においても出席率向上の施策を維持し、小テストの実施・添削・返却に加えて、適宜質疑応答を加える形でのモラル向上策を各担当で講じ続ける必要がある。

系： 法律

受講者数： 94

回答者数： 84

質問No.	昨年平均	今年平均	企業法A1	企業法B	商法	会社法	上級会社法	租税法理論	法人税法
1	4.68	4.59	4.54	4.44	4.56	4.52	4.50	5.00	4.50
2	3.13	3.40	3.08	3.22	3.06	3.05	3.00	5.00	3.00
3	4.63	4.70	4.46	4.56	4.69	4.67	4.83	5.00	5.00
4	4.81	4.73	4.58	4.44	4.69	4.67	5.00	5.00	4.75
5	4.72	4.78	4.81	4.56	4.81	4.67	4.83	5.00	5.00
6	4.51	4.69	4.54	4.56	4.69	4.67	4.67	5.00	4.50
7	4.45	4.54	4.28	4.33	4.44	4.38	4.83	5.00	4.50
8	4.51	4.65	4.54	4.33	4.63	4.57	4.83	5.00	4.75
9	4.66	4.71	4.65	4.33	4.69	4.57	5.00	5.00	4.50
10	4.31	4.54	4.31	4.22	4.69	4.38	4.67	5.00	4.75
11	4.69	4.72	4.69	4.44	4.81	4.52	4.83	5.00	4.50
12	4.79	4.96	5.00	4.89	4.94	4.90	5.00	5.00	5.00
13	2.30	2.58	2.27	1.78	2.25	1.86	2.33	5.00	3.75
14	2.35	2.99	2.65	3.11	2.38	2.62	2.17	5.00	3.00
15	4.36	4.44	4.23	4.00	4.44	4.14	4.83	5.00	4.50
16	4.44	4.55	4.46	4.44	4.63	4.40	4.83	—	4.75
17	4.22	4.37	4.23	4.22	4.38	4.20	4.83	—	4.50
回答者数	73	84	26	10	16	21	6	1	4

受講生の傾向

昨年度よりも入学者が増加したということもあって、1年生配当科目を中心に、法律系科目全体の受講者が増加した。ただ、全体の受講者数との関係および公認会計士試験科目あるいは税理士試験科目との関係でみるともう少し受講者が多くても良いと思われる。受講生の傾向としては、おおむね出席率は高くまじめに取り組んでおり、その満足度も高かったが、受講生の少ない授業ほどその傾向が顕著に見られた。担当教員との距離感や、授業レベルと受講者のレベルの一致などがあるとと思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

法律系科目は法制度そのものを理解することのみならず、論理的思考能力を養成することをも目的とするので、制度の趣旨から法律や規定の内容等を理解し、それを応用することができるような能力が身につくよう心掛けた。また、知識として得るといっても、法学に関しては論理が明確であるので、その論理のつながりの中で理解し知識が得られるように配慮した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

法律系科目全体として、学生から受ける印象の一つに、法律系科目を暗記科目としてとらえる側面があるように思う。むしろ法律系科目には論理的な思考能力を養成するという目的の方が強くあり、論理的に物事を考えることができ、かつそこから得られる知識であるからこそ、結果として得た知識を忘れたくないものとしてとることができるのである。そこで、今後は法律系科目の論理的な思考能力の養成をより強調して、教育を行えるよう工夫していきたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

法学の論理の明確さは、理解のしやすさ、わかりやすさといった魅力につながるものである。またある程度まで学習を進めていくと、自らの論理的思考で法学学習を進めていくことができるようになるので、もっと法学学習の面白さを伝えていきたいと思う。さらに、個々の法律系科目は独立して存在するのではなく、それぞれがつながりの中で存在している(例えば、企業法と会社法)。その各科目のつながりの中でお互いの理解ができるようにし、そうすることによって、それぞれの科目の理解が深まっていくと思われる。

系： ファイナンス
 受講者数：19 回答者数：18

質問No.	昨年平均	今年平均	インベストメント論	コーポレート・ファイナンス論	資本市場論	国際財務戦略論
1	4.64	3.86	4.00	4.25	3.33	—
2	3.06	3.19	3.33	3.25	3.00	—
3	4.71	3.97	4.00	3.92	4.00	—
4	4.73	4.11	3.67	4.33	4.33	—
5	4.64	4.31	4.33	4.25	4.33	—
6	4.61	4.06	4.33	4.17	3.67	—
7	4.58	3.86	3.67	4.25	3.67	—
8	4.77	3.97	3.67	4.25	4.00	—
9	4.58	3.92	3.67	4.08	4.00	—
10	4.60	4.00	3.67	4.33	4.00	—
11	4.68	4.31	4.00	4.58	4.33	—
12	4.82	4.17	3.67	4.83	4.00	—
13	2.10	2.22	2.67	2.67	1.33	—
14	2.31	2.47	3.33	2.42	1.67	—
15	4.71	4.06	4.00	4.50	3.67	—
16	4.55	4.06	4.00	4.18	4.00	—
17	4.48	4.00	4.33	4.00	3.67	—
回答者数	29	18	3	12	3	—

※国際財務戦略論は、諸事情により未実施

受講生の傾向

割と熱心に受講していた。ただし、会計情報の利用という側面よりも、ファイナンス関係の考え方に興味を持っているという傾向が強いように感じた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

科目の特徴を明確にするように授業を行った。さらに、会計専門職の新たな職業分野として「CFO」やその関連業務について言及するようにした。また、証券アナリスト協会のプライマリー・プライベートバンカー試験における単位免除を意識した内容とした。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

昨年度と同様、抽象的な議論をできる限り身近な事例で説明する等、学生が興味を持つような授業を行う。ファイナンス自体への高い興味を持つ学生もあり、将来のCFO養成のための授業も取り入れる。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度と同様、抽象的な議論をできる限り身近な事例で説明する等、学生が興味を持つような授業を行うとともに、ファイナンス自体への高い興味やプライマリー・プライベートバンカー単位免除に向けて、将来のCFO養成のための授業を行う。

系： 行政
 受講者数： 6 回答者数： 5

質問No.	昨年平均	今年平均	公会計理論	政府・自治体会計論	国際公会計制度論
1	4.50	4.50	4.50	4.00	5.00
2	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
3	4.50	4.67	4.00	5.00	5.00
4	4.50	4.83	4.50	5.00	5.00
5	4.50	4.50	3.50	5.00	5.00
6	4.50	4.50	3.50	5.00	5.00
7	4.50	4.17	2.50	5.00	5.00
8	4.50	4.67	4.00	5.00	5.00
9	4.50	4.50	3.50	5.00	5.00
10	4.17	4.50	3.50	5.00	5.00
11	4.50	4.83	4.50	5.00	5.00
12	4.83	4.83	5.00	5.00	4.50
13	2.17	3.17	4.00	3.00	2.50
14	2.33	2.83	3.50	3.00	2.00
15	4.50	4.33	4.00	4.00	5.00
16	4.50	4.67	5.00	4.00	5.00
17	4.50	4.67	4.00	5.00	5.00
回答者数	4	5	2	1	2

受講生の傾向

受講生の人数が非常に少ない状態が続いている。一方で、授業の内容については満足度の高い結果となっている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生の関心や理解度に合わせた形で講義を進めたこと、最近のトピックを多く紹介して関心を喚起する等の工夫を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

行政系に関心のある受講生（公務員志望等）や、公会計に関心のある受講生等、各人の関心に応じて、タイムリーな話題を提供し、考えさせ、発表する機会をより充実させる方針である。また1回で理解できないような複雑な内容については、予習・復習の指導を丁寧に行う予定である。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き行政系に関心のある受講生（公務員志望等）や、公会計に関心のある受講生等、各人の関心に応じて、タイムリーな話題を提供し、考えさせ、発表する機会をより充実させる方針である。また1回で理解できないような複雑な内容については、予習・復習の指導を丁寧に行う予定である。

系： 経済・IT

受講者数： 38

回答者数： 35

質問No.	昨年平均	今年平均	基本会計プログラム演習	基本監査プログラム演習	実践会計プログラム演習
1	4.54	4.58	4.38	4.38	5.00
2	3.22	3.20	3.25	3.25	3.09
3	4.30	4.55	4.25	4.50	4.91
4	4.49	4.55	4.38	4.38	4.91
5	4.50	4.59	4.63	4.25	4.91
6	4.34	4.57	4.44	4.38	4.91
7	4.48	4.62	4.56	4.38	4.91
8	4.53	4.55	4.50	4.25	4.91
9	4.35	4.57	4.56	4.25	4.91
10	4.28	4.52	4.56	4.38	4.64
11	4.55	4.59	4.50	4.38	4.90
12	4.71	4.94	5.00	5.00	4.82
13	2.10	2.71	3.19	2.13	2.82
14	2.87	3.29	4.00	2.88	3.00
15	4.32	4.48	4.25	4.38	4.82
16	4.39	4.65	4.44	4.50	5.00
17	4.40	4.60	4.50	4.29	5.00
回答者数	72	35	16	8	11

受講生の傾向

科目の配当年次により、受講生の傾向が異なるようである。1年次配当科目では、欠席率が低く熱心に受講しているものの受動的な受講姿勢である学生が多く、一方、2年次配当科目では、出席率も高く、積極的な受講姿勢である学生が多いようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

コンピュータの使用に関する学生間の能力差や学生の関連内容に対する知識の不充分さを看過できない状態があり、演習を行う上で、その差や不十分な知識を埋める策を講じ、演習を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

各科目、受講生の緊張感を維持しつつ、関心を高め、ひとつひとつ理解を深めるよう工夫を講じるとされている。また、科目間で意見交換をしつつ、受講生の理解を深める工夫を検討したい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受動的な受講姿勢の学生に、より積極的に受講できるような工夫を講じていくとともに、演習中の受講生の相互補助関係を重視し、共育的な環境を醸成し、活発な受講を促していきたい。

系:個別演習科目(ソリューション・イン・アカデミック)

受講者数: 19

回答者数: 19

質問No.	昨年平均	今年平均	坂口クラス	松本クラス	三島クラス	清水クラス	宗岡クラス
1	4.39	4.42	4.50	4.00	4.75	5.00	4.17
2	3.50	3.22	3.17	3.00	3.50	4.00	3.17
3	4.50	4.58	4.50	4.50	4.75	4.00	4.50
4	4.67	4.50	4.50	4.00	5.00	4.00	4.33
5	4.56	4.67	4.50	4.50	5.00	4.00	4.50
6	4.58	4.50	4.50	4.00	5.00	4.00	4.17
7	4.56	4.17	4.50	3.00	5.00	4.00	4.33
8	4.83	4.83	4.50	5.00	5.00	5.00	3.83
9	4.36	4.25	4.50	3.50	4.75	4.00	3.83
10	4.58	4.42	4.50	4.00	4.75	5.00	4.17
11	4.75	4.64	4.67	4.50	4.75	5.00	4.17
12	4.92	4.94	4.83	5.00	5.00	5.00	4.33
13	3.75	3.47	2.17	5.00	3.25	3.00	1.17
14	2.94	2.86	2.33	3.00	3.25	2.00	1.17
15	4.67	4.58	4.50	4.50	4.75	3.00	4.17
16	4.75	4.56	4.50	4.50	4.67	4.00	4.17
17	4.67	4.72	4.50	5.00	4.67	4.00	4.17
回答者数	8	19	6	2	4	1	6

受講生の傾向

開講数を増やしたため受講生の数が昨年に比べて倍以上に増加した(8→19名)。授業外の予習復習等の学習(アンケート13~14)については、昨年と同様に低い傾向にあるが、受講生が増加したことに伴い満足度が下がるという傾向にはなく、アンケート結果も良かったといえる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講者数が増えたことによりクラスが活発化した反面、受講生の間で学力にばらつきが出てくるという面もあり、演習の内容に工夫が必要となった。各担当教員は学力のギャップを埋めるための工夫を行った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

少人数であるため、受講生のニーズに合った授業の構成、ディスカッション等を有効に進めていくための課題の出し方等において担当者の工夫を求めていく。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

学力に差のある受講生が複数入ってくることを前提に、演習の内容を工夫していく必要がある。

系:個別演習科目(ソリューション・イン・プロフェッショナル)

受講者数: 8

回答者数: 8

質問No.	昨年平均	今年平均	清水クラス	三島クラス	松本クラス	大西クラス
1	4.75	4.83	5.00	5.00	5.00	4.33
2	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
3	4.88	4.83	5.00	5.00	5.00	4.33
4	4.88	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
5	4.88	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
6	4.75	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
7	4.50	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
8	4.75	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
9	4.63	4.58	5.00	5.00	5.00	3.33
10	4.75	4.75	5.00	5.00	5.00	4.00
11	4.63	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
12	4.63	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
13	3.13	3.29	5.00	3.50	3.00	1.67
14	2.63	3.25	5.00	3.00	3.00	2.00
15	4.63	4.79	5.00	4.50	5.00	4.67
16	4.63	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
17	4.50	4.92	5.00	5.00	5.00	4.67
回答者数	5	8	1	2	2	3

受講生の傾向

全般的に各クラスの参加者が少なかったため、個別のニーズに応じた指導が行われた結果、アンケート結果についても高い満足度が得られたものと考えられる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生は5名から8名に増加した点では評価できる。また、時間外の学習(アンケート13~14)についても指導を強化した結果、改善されたように思われる。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

H27時間割編成方針において個別演習科目の設置を増やし受講生の増加を図った。時間外の活動を推進する工夫を行うよう各担当者に働きかける。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き個別演習科目を多く設置し、受講生数を増やす努力を行う。それとともに、受講生のニーズに応じたきめ細かな指導を行いモチベーションを高める演習内容としていく必要がある

系:個別演習科目(ソリューション・イン・エキスパートイズ)

受講者数: 12

回答者数: 12

質問No.	昨年平均	今年平均	柴 クラス	宗岡クラス	清水クラス	松本クラス	三島クラス	大西クラス	富田クラス
1	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	4.67
2	—	2.67	2.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.67
3	—	4.33	5.00	5.00	3.00	5.00	4.50	5.00	4.67
4	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00
5	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00
6	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	4.67
7	—	4.33	5.00	5.00	3.00	5.00	5.00	5.00	4.33
8	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00
9	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	4.67
10	—	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00
11	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	4.67
12	—	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
13	—	3.67	5.00	2.00	4.00	4.00	4.00	5.00	3.67
14	—	2.67	5.00	2.00	1.00	2.67	3.00	3.00	3.33
15	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	4.50	5.00	5.00
16	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	4.50	5.00	5.00
17	—	4.67	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00
回答者数	—	12	1	1	1	3	2	1	3

受講生の傾向

1クラス1名~3名の少人数クラスでの運営となった。回答13~14は、予習・復習の時間を問うものであったが、それらの時間は比較的少ないものの、それ以外の演習内容に対する満足度は高い傾向にあったといえる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

各教員の担当する専門内容においてそれぞれ受講生のモチベーションを高めるよう工夫が行われた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(昨年度不開講)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生のニーズに応じた、またモチベーションを高めるような演習内容となるよう引き続き注力していく必要がある。またもう少し各クラスの参加者を増やしていく努力も必要。

系:個別演習科目(論文指導・修士論文(基礎))

受講者数: 4

回答者数: 3

質問No.	昨年平均	今年平均	中村クラス
1	5.00	4.33	4.33
2	3.00	3.67	3.67
3	5.00	4.67	4.67
4	5.00	4.67	4.67
5	5.00	4.33	4.33
6	5.00	4.33	4.33
7	5.00	4.33	4.33
8	5.00	4.33	4.33
9	5.00	4.33	4.33
10	5.00	4.67	4.67
11	5.00	4.33	4.33
12	5.00	5.00	5.00
13	5.00	4.33	4.33
14	5.00	2.33	2.33
15	5.00	4.67	4.67
16	4.50	4.33	4.33
17	5.00	4.00	4.00
回答者数	2	3	3

受講生の傾向

税務系の受講生(3名)のみであり、いずれも中村准教授が指導した。中村准教授の分析では、会計及び会社法と租税法との接点にかかる課題に関心が集まった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

中村准教授については昨年は同科目不開講であったが、昨年度系総合で記載した「受講生の特性・水準に応じた指導」に注力して頂いた。課題を与えられてのレジュメづくりやプレゼンについては慣れていないところから、個別指導により次第にレベルアップが図られた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

受講生の特性・水準に応じた指導が必要である。また論文作成のための基礎的な書く力を身に着けさせるための気長な指導が必要。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生に対して課題を与え、発表レジュメを作成すること、その中で出典等について明確にすること、それらを明瞭に発表すること等、指導を強化していく。

系:個別演習科目(論文指導・修士論文(実践))

受講者数: 2

回答者数: 2

質問No.	昨年平均	今年平均	柴クラス	中村クラス
1	—	5.00	5.00	5.00
2	—	3.00	3.00	3.00
3	—	5.00	5.00	5.00
4	—	5.00	5.00	5.00
5	—	5.00	5.00	5.00
6	—	5.00	5.00	5.00
7	—	5.00	5.00	5.00
8	—	5.00	5.00	5.00
9	—	5.00	5.00	5.00
10	—	5.00	5.00	5.00
11	—	5.00	5.00	5.00
12	—	5.00	5.00	5.00
13	—	5.00	5.00	5.00
14	—	5.00	5.00	5.00
15	—	5.00	5.00	5.00
16	—	5.00	5.00	5.00
17	—	5.00	5.00	5.00
回答者数	—	2	1	1

受講生の傾向

受講生が柴教授、中村教授それぞれのクラスで1名ずつであった。いずれも個人のニーズに合わせたきめ細かな指導が行われた結果、高い満足度を表すアンケート結果となった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受講生1人1人の進捗度に応じた指導が行われた。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

該当なし(今年度新設科目)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

個人の関心に応じた指導を行い優れた資質を引き出すこと、および修士論文の完成に資するため、中間報告、最終報告を行わせ、他者のアドバイスを受ける機会を設ける等に配慮する。

系別平均

質問No.	財務会計系	管理会計系	税務会計系	監査系	法律系	経営系	ファイナンス系	行政系	経済・IT系
1	4.40	4.59	3.71	4.50	4.59	-	3.86	4.50	4.58
2	3.26	3.36	3.43	3.26	3.40	-	3.19	3.00	3.20
3	4.34	4.45	4.07	4.46	4.70	-	3.97	4.67	4.55
4	4.35	4.49	3.86	4.46	4.73	-	4.11	4.83	4.55
5	4.39	4.50	3.79	4.48	4.78	-	4.31	4.50	4.59
6	4.26	4.46	3.71	4.45	4.69	-	4.06	4.50	4.57
7	4.30	4.48	3.64	4.39	4.54	-	3.86	4.17	4.62
8	4.39	4.56	3.93	4.43	4.65	-	3.97	4.67	4.55
9	4.11	4.40	3.50	4.24	4.71	-	3.92	4.50	4.57
10	4.37	4.42	4.21	4.39	4.54	-	4.00	4.50	4.52
11	4.33	4.46	3.64	4.45	4.72	-	4.31	4.83	4.59
12	4.87	4.83	5.00	4.80	4.96	-	4.17	4.83	4.94
13	2.50	2.42	1.71	2.50	2.58	-	2.22	3.17	2.71
14	2.72	2.80	2.43	2.72	2.99	-	2.47	2.83	3.29
15	4.26	4.32	3.57	4.19	4.44	-	4.06	4.33	4.48
16	4.33	4.40	3.36	4.39	4.55	-	4.06	4.67	4.65
17	4.25	4.32	3.50	4.32	4.37	-	4.00	4.67	4.60
回答者数	182	121	14	105	84	-	18	5	35

受講生の傾向

系全体として、学生の授業出席率は高く、授業内容についてもおおむね満足していると同時に、授業に対する理解度も高いようである。また、授業に対する意欲も高く、熱心に取り組んでいると評価できる。その反面で、授業の予習や復習にはあまり時間をかけていないようである。あと、授業の進め方や、教員の授業の準備および学生に対する対応等については、おおむね高い評価を得ている。これらについて、昨年度と大きく変わることはない。

今後の対応

今後の対応としては、最終的には個々の授業の特性から、それぞれにおいて改善すべき内容も異なってくるので、各授業の対応にゆだねるしかない。しかし、全体としていえることは、上でも述べたように、授業そのものに対しては学生の満足度は高く、理解もできているようであるので、その前後にある授業の予習や復習をもっとしっかりとできるように改善すれば、より理解度・満足度は高くなるように思われる。抽象的に予習や復習を促すのみならず、積極的に課題を提供したり、定期的に小テストを実施したりすることは、効果的であろう。また、授業の中で質疑応答や討論の中で学生の理解を随時確認することも、学生の予習・復習といった時間外学習へのモチベーションを高めることになる。全体的に授業を実施するにあたり、学生による授業そのものの理解が得られるよう工夫することも当然に必要であるが、授業時間外においても、学生によって積極的に当該授業の学習が進められるよう工夫することが必要である。

Ⅲ. 2015 年度授業評価アンケートフォーム

2015 年度 関西大学「会計専門職大学院学生による授業評価」アンケート

会計専門職大学院 FD 委員会

このアンケートは、授業の改善を目的として実施するものであり、担任者が授業をより一層充実するための資料として利用するものです。したがって、皆さんの成績評価にはまったく関係がありませんので、正直な声をお聞かせください。

- ・アンケートの回答は、マークシートに記入してください。
- ・授業科目、クラス及び担任者を記入してください。
- ・このアンケートは匿名です。あなたの氏名は書く必要はありません。

I. 授業の評価

II. 授業への取組み

I. 授業の評価

1	授業内容は、講義要項、授業計画に示したものに沿った内容でしたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
2	この授業の進度はどうでしたか。			
5. かなり早い	4. 早い	3. ちょうどよい	2. 遅い	1. かなり遅い
3	この授業は教員によってよく準備されていましたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
4	学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
5	この授業での教員の話し方や声の大きさ、説明の仕方は適切でしたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
6	教科書・配布資料の利用は適切でしたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
7	ホワイト・ボードや OHP、パソコン等の機材の使い方は適切でしたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
8	教員は、学生からの質問に的確に対応しましたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
9	宿題および小テストの内容・回数は、講義内容を理解する上で効果的でしたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
10	この授業のクラスの規模は適切でしたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない
11	全体としてこの授業を受講して満足しましたか。			
5. 強く思う	4. そう思う	3. どちらともいえない	2. そう思わない	1. 全く思わない

裏面につづく

II. 授業への取組み

12 | この授業への出席状況はどうでしたか。

5. 90%以上 4. 70%以上 3. 50%以上 2. 30%以上 1. 30%未満

13 | この授業についての予習を、毎回どれくらいしましたか。

5. 2時間以上 4. 1時間30分程度 3. 1時間程度 2. 30分程度 1. 0時間

14 | この授業についての復習を、毎回どれくらいしましたか。

5. 2時間以上 4. 1時間30分程度 3. 1時間程度 2. 30分程度 1. 0時間

15 | この授業に触発されてさらに深く学習したいと思いましたか。

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

16 | この授業を通じて、職業会計人に必要な知識が深まった、能力が高まったと感じましたか。

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

17 | あなたは全体としてこの授業を受講して理解できましたか。

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

—以上—

ご協力ありがとうございました。

IV. 講演会

2015 年度 関西大学会計研究科講演会開催一覧

■客員教授講演会（新入生指導行事） [平成 27 年 4 月 3 日(金)開催]

◇中央大学大学院戦略経営研究科教授／前 IFRS 財団評議員・副議長

藤沼亜起氏（客員教授）

演題「目指そう、挑戦しよう 会計・国際人材への道」

■会計専門職大学院 創設 10 周年記念シンポジウム [平成 27 年 7 月 11 日(土)開催]

テーマ「会計専門職教育の課題と展望」

<第 1 部> 報告会

◇公認会計士関大会前会長

山田拓幸氏（講師）

演題「公認会計士から見た会計専門職教育」

◇元住友商事株式会社代表取締役副社長

島崎憲明氏（客員教授）

演題「企業から見た会計専門職教育」

◇大学院会計研究科長

三島徹也（教授）

演題「関西大学会計専門職大学院の 10 年の歩みとこれから」

<第 2 部> 討論会

テーマ「会計専門職教育の課題と展望」

◇パネリスト

島崎憲明氏（客員教授）、三島徹也（教授）、玉置栄一（特任教授）

■客員教授講演会 [平成 27 年 10 月 7 日(水)開催]

◇名古屋経済大学大学院教授／金融庁／企業会計審議会委員・監査部会長

脇田良一氏（客員教授）

演題「監査報告書改革の国際的潮流」

■客員教授講演会 [平成 27 年 12 月 16 日(水)開催]

◇慶応義塾大学教授／元総務大臣

竹中平蔵氏（客員教授）

演題「世界経済の変動とアベノミクス」

■客員教授講演会（入学前教育指導） [平成 28 年 3 月 23 日(土)開催]

◇あずさ監査法人 前大阪事務所長

吉田享司氏（客員教授）

演題「監査を取り巻く環境変化と求められる人材」

藤沼亜起 客員教授講演会

中央大学大学院戦略経営研究科教授、前IFRS財団評議員・副議長

『目指そう、挑戦しよう』

会計・国際人材への道』

会計専門職大学院では、平成27年度入学生を対象とした新入生行事の一環として、中央大学大学院戦略経営研究科教授、前IFRS財団評議員・副議長の藤沼亜起客員教授をお招きし、講演会を開催します。

多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成27年4月3日（金）
13:00~14:30
- 場所：千里山キャンパス第2学舎
2号館4階 C402教室
- 演題：目指そう、挑戦しよう
会計・国際人材への道
- 対象：会計研究科新入生・在学生、
幅広い分野で活躍する会計プロ
の道に興味のある学部生
- 事前申込は不要**です。

<会場案内図>

第2学舎2号館
4階 C402教室

講師 藤沼亜起 氏

関西大学会計専門職大学院
客員教授

<お問合せ先>

会計専門職大学院

電話 06-6368-1121 (代表)

E-Mail kaikai@ml.kandai.jp

関西大学会計専門職大学院 創設10周年記念シンポジウム

『会計専門職教育の課題と展望』

学部生、大学院生、教職員及び学外一般、多数の方のご来聴をお待ちしています。
～聴講自由・事前申込は不要～

日時：平成27年7月11日(土) 13:00～16:10 (12:30開場)

場所：千里山キャンパス第2学舎2号館3階C303教室

<第1部> 報告会 13:00～15:30

- 講師 山田 拓幸氏 (公認会計士関大会前会長)
- 演題 「公認会計士から見た会計専門職教育」
- 講師 島崎 憲明氏 (元住友商事株式会社代表取締役副社長、大学院会計研究科客員教授)
- 演題 「企業から見た会計専門職教育」
- 講師 三島 徹也 (大学院会計研究科長)
- 演題 「関西大学会計専門職大学院の10年の歩みとこれから」
- コーディネーター 富田 知嗣 (大学院会計研究科教授)

<第2部> 討論会 15:30～16:10

- テーマ 「会計専門職教育の課題と展望」
- コーディネーター 富田 知嗣
- パネリスト 島崎憲明氏、三島徹也、玉置栄一 (大学院会計研究科特任教授)
- 総合司会 宮本勝浩 (関西大学名誉教授)

<会場案内図> 第2学舎2号館3階C303教室

協賛 会計大学院協会、公認会計士関大会

<お問合せ先>

会計専門職大学院 電話：06-6368-1263 (直通)

Mail：kaikai@ml.kandai.jp

脇田良一 客員教授講演会

名古屋経済大学大学院教授、金融庁／企業会計審議会・監査部会長

～監査報告書改革の国際的潮流～

会計専門職大学院では、名古屋経済大学大学院会計学研究科教授、金融庁企業会計審議会委員・監査部会長の脇田良一客員教授をお招きし、講演会を開催します。

学部生、大学院生、教職員及び学外一般、多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成27年10月7日（水）
14：40～16：10（4時限目）
- 場所：千里山キャンパス第2学舎
2号館 4階 C402教室
- 演題：監査報告書改革の国際的潮流
- **聴講自由・事前申込は不要です。**

講師 脇田良一 氏

関西大学会計専門職大学院
客員教授

<お問合せ先>

関西大学会計専門職大学院
電話 06-6368-1121（代表）
Mail: kaikai@ml.kandai.jp

竹中平蔵 客員教授講演会

慶応義塾大学教授、元総務大臣

～世界経済の変動とアベノミクス～

会計専門職大学院では、慶応義塾大学教授、元総務大臣の竹中平蔵客員教授をお招きし、講演会を開催します。

学部生、大学院生、教職員及び学外一般、多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成 27 年 12 月 16 日（水）
16：20～17：50（5 時限目）
- 場所：千里山キャンパス
第 2 学舎 BIG ホール 100
- 演題：世界経済の変動とアベノミクス
- **聴講自由・事前申込は不要**です。

<会場案内図>

第2学舎5号館
BIGホール100
<15時50分開場予定>

講師 竹中平蔵 氏

関西大学客員教授

<お問合せ先>

関西大学会計専門職大学院

電話 06-6368-1121（代表）

Mail : kaikei@ml.kandai.jp

この伝統を、超える未来を。

関西大学は平成 28 年に
創立 130 周年を迎えます

吉田 享司 客員教授講演会

公認会計士・米国公認会計士 あずさ監査法人 前 大阪事務所長

～監査を取り巻く環境変化と求められる人材～

会計専門職大学院では、平成 28 年度入学予定者を対象とした入学前指導の一環として、あずさ監査法人 前大阪事務所長の吉田享司客員教授をお招きし、講演会を開催します。公認会計士を目指す学部生の聴講も歓迎しますので、多数の方のご来聴をお待ちしています。

- 日時：平成 28 年 3 月 23 日（水）
16：00～17：30
- 場所：千里山キャンパス第 2 学舎
2 号館 5 階 C507 教室
- 演題：監査を取り巻く環境変化と求められる人材
- 対象：会計研究科入学予定者・在学生
公認会計士を目指す学部生
- **事前申込は不要**です。

<会場案内図>

第2学舎2号館
5階 C507教室

講師 吉田享司 氏
関西大学会計専門職大学院
客員教授

<お問合せ先>
会計専門職大学院
電話 06-6368-1121 (代表)
E-Mail kaikai@ml.kandai.jp

関西大学大学院会計研究科（会計専門職大学院）

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

電話 (06)6368-1121 (代表)

Fax (06)6368-0248